緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～

雲英澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～

【Ｎコード】
Ｎ３３０１Ｌ

【作者名】
雲英澪

【あらすじ】
――――空から降ってくるなら女の子の方がいいに決まってる。
ところがそんなオレに降ってきてくれるのは女の子なんかではなく・・・？
明智小五郎の孫である蒼志の身に降りかかる災難。
しかしそれは紡がれ始めた曲の序曲でしかなかった。
オリ主と原作キャラたちが奏でる新たな物語。
赤と青は交錯し、物語は絡まり、緋と蒼の楽譜は違う旋律を紡ぎながら、１つの曲を紡ぎ始める。

独奏曲に交わる協奏曲をご覧ください

1弾　空から降ってきたのは・・・？（前書き）

私の人生初投稿となります！！
習作の意味もある作品なので、ご指摘バンバンお願いします！！
あ、でもなるべく優しくお願いします、ホント。

なにはともあれ『緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～』始まります。

1弾　空から降ってきたのは・・・？

――――空から降ってくるんなら、女の子の方が良いに決まってる。

この前観た映画では、降ってきてたんだ。

まあ、映画とかマンガならいい導入だろうな。

それは不思議で特別なことが起きるプロローグ。

主人公が正義の味方にでもなって、大冒険が始まるんだろう。

ああ、だからまずは空から女の子が降ってきてほしい！

・・・・・・高2男子たるオレがそう思うことになんの罪があろうか。

その子が普通の子じゃないことぐらい見当がつく。が、だ。

多少面倒事に巻き込まれようが、その子が美少女なら大抵のことはやれる・・・と思う。

だってこの状況に比べたらマシだもんなあ。

さて、現実逃避終了

「何だってんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

現在チャリンコで絶賛逃走中なオレ。何から逃げてんのかといえば、

「止まったら　お前を　撃ちやがります。」

上空を仰ぎ見れば、大型のラジコンヘリが追いかけてくる。

その下部には、小型スピーカーと短銃身のサブマシンガンＭＰ５ＫＡ１。

各国で採用されてるドイツ製サブマシンガンの最軽量タイプだ。

「ってそんなこと観察してる場合じゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！」

慌ててペダルを漕ぐ足に力を込めなおす。

「大声を出したり　助けを求めたり　スピードを緩めたり　止まろうとしても　撃ちやがります」

「いや、条件多すぎだから！！」

思わずつっこんでしまった。途端に降ってくる鉛弾。ハンドルを切ってギリギリで回避する。

「もう一度　警告します　大声を・・・」

「だあぁぁぁ、わかってるてーの・・・！」

また撃たれたら堪らないから、小声で呟く。くそっ、なんでオレがこんな目にあってんだよ！

思い返せば今朝、起きて自転車に乗るまでは普通の朝だった。そう、自転車に乗るまでは。

その音はいつもどおり男子寮から学校に向かう途中に聞こえてきた。

『バララララララ』

それは、プロペラが回転する音。ヘリにしては小さい。

振り返ってみれば、大型のラジコンヘリが飛んでる。最初は

（車輌（ロジ）科の連中が装備（アムド）科とつるんで遊んでんのか？）

そんな考えと共にとある大男（バカ）と天才（ロリ）技師の顔を思い出す。

とりあえず自転車を停めてよく目を凝らそうとすると

パスパスパスッ！！

足元に弾痕が穿たれた。

「は？」

そこで一回思考が停止したオレを誰が責められようか、いや、責められはしない。反語。

「このヘリは　お前を狙って　やがります」

しかし上から聞こえてくる合成音声に、我に返る。

とにかくあのヘリから逃げねぇと・・・！

そうしてオレの逃走が始まったのだった。

以上、回想終了

「クソッタレ！なんでこんな目に遭わなきゃなんねぇんだよ」

今度は口に出して呟く。こんな目に遭わされる覚えなんて・・・

腐るほどある。えぇ、そりゃもう。

職業柄仕方ないとはいえ、自分で考えて軽くテンションが下がる。

まあ仕方ないと思うしかないな、ホント。オレ仮にも武偵だし。

武装探偵。　通称武偵

それは凶悪化する犯罪に対抗するために設けられた、国際資格。

武装を携行することを許可され、逮捕権を有する探偵。それが武偵。

ただ、実際には金さえ積まれれば武偵法の許す限りどんなことでも請け負う、要は便利屋だ。

ま、最も、オレはプロじゃない。

武偵を育成する、東京武偵高校の生徒だ。

とはいえ、教育課程（カリキュラム）上それなりに依頼はこなしてきている。

で、だ。その過程で様々な方々から恨みを買っちゃってるわけだ。

こんな目に遭う覚えなんてそれこそ数え切れない。

だから納得はいかなくても理解は出来ちまうんだな、これが、悲しいことに。

そんなことよりも今はこの状況をどうするかだ。

まずは振り向いて撃ち落す。

振り向きざまに拳銃を抜いて、撃たれる前に撃つ！

よっしゃ！万事解決！

・・・いや、ムリ。オレにそんな技量ないし。

こんなグラグラした足場で当てる自信はねぇ。

じゃあ助けを呼ぶ。

「助けてー！！」と叫ぶ。

武偵高生徒が来て助けてくれる

よっしゃ！万事解決！

・・・だから大声とか出せねぇだろオレ！忘れんなよオレ！

あぁもう！オレにどうしろってんだよ！？

こんなとこで死にたかねぇぞ・・・

オレの爺さんだったらどうにか出来たかもしんねぇが

少なくとも今のオレには何も出来ない。

くそっ！！本当にどうすれば・・・！？

いや、本当は分かっているんだ、どうすればいいかなんて。
簡単なことだ、今のオレで出来ないなら、
今のオレでやらなきゃいいんだ。

それ位は理解している、でも、
「・・・納得いかねぇ」
こんな状況でほいほい使いたくなるほど、安っぽいもんじゃないんだ、『アレ』は。
「イヤだな、いや、イヤってレベルじゃねぇ。もう滅入るってレベルだよ。」
ムダと知りつつ、呟いてみる。『アレ』の反動は、正直二度と味わいたくない。しかし、死ぬのに比べたらいくらかはマシだ。・・・本当にいくらかだが。

「・・・ふぅ。そんじゃま、久しぶりに、やるとしますか。」

オレは深く息を吸い、目を閉じる。

意識的に一時的に外界の情報を全てシャットダウンする。

そして、目をゆっくり開けると、

・・・・・・・

世界が広がった

ヘリのローターの回転音

自転車のギアが回る音

風の流れる音

自分の心臓の鼓動

全てが同時に、明瞭に、知覚できる。

オレは右手で懐から銃―――デザートイーグル・ＡＥ５０・１０インチモデルを抜くと、右半身をヘリに向け、狙いを定める。

ヘリの方もオレの様子に気づいたのか、先ほどの警告どおりすぐさまオレに銃撃してきた。

しかし

一発も当たらない。

オレの左手が、まるで別の生き物のように、自転車のハンドルを滑らかにさばく。

そして、照準がヘリに定まった瞬間

「・・・狙い撃つぜ」

本体に当てず、かつ、下部の接合部―――ＭＰ５とヘリの接合部に当たる軌道に弾丸を乗せる。

弾丸は狙いどおりの軌跡を描き

接合部は狙いどおりに吹き飛ばした

続いてオレは、姿勢を崩しているヘリのローターに狙いを定める。

無造作に銃口を向け、撃つ。

すぐさま振り返り、ヘリの落下地点に向かう。命中したのなんか、見なくてもわかる。

そう、今のオレが外すなんてことは、ありえない。

チャリに乗ったまま落ちてきたラジコンヘリを片手でキャッチ。

これでひとまず安全だ。ふう、やっとひと段落ついたぜ。

と思ったのも束の間だった。

（あれ・・・？）

めまいがしてきて、たまらず自転車から転げ落ちる。

なんとかヘリだけは傷つけずにすんだ。

大事な証拠物件が無事でホッとするオレ。

だが、もう限界だった。意識が暗転し始める。

『アレ』を使った反動がきたってことだ。

起きた後の事を考えて、薄れ行く意識のなか車輌科（ロジ）の武藤（アホ）にメールを入れておく。

（これで後はなんとかなんだろ）

そう思い、目を閉じようとしたとき、不意に視界の端に何かが映りこんだ。

それは空から降ってきた

それは一枚のカードだった

そしてそれはオレのもとへと落ちてくる

オレは無理やり意識を保って、それを読む。

「な、なんなんだよこれは・・・！」

そこには、こう、書いてあった。

『今日から三日後、貴様が初代明智より受け継ぎし指輪を頂きに参上する。

今回は貴様を試すためのちょっとした余興だ。

素直に渡して貰おうなどと言う気は毛頭ない。

正々堂々と、正面から力で貴様をねじ伏せてやる。

首を洗って待っているがいい。

親愛なる明智の三代目へ　　怪人二十面相』

「なんだってんだよ、マジで・・・」

そこまでだった。

朝から散々な目にあったオレの脳みそは遂に

処理落ちした。

要はオレは、気絶したのだった。

これが、この、空から鉛弾と物騒で時代遅れな予告状が降ってきた朝が

オレの運命を変える　朝だとは　このときのオレは　思いもしなかった

この朝から、オレの、明智蒼志（アケチ ソウシ）の運命は、大きく回り始めたのだった。

1弾　空から降ってきたのは・・・？（後書き）

弾篭め（あとがき）
初めまして雲英と申します。

今回が初の投稿ですので文体が未熟なのは仕方ないと思って頂けると幸いです。

それから、ご存知の方もいるとは思いますが、この作品、一回投稿した後で大幅改稿しています。本当に情けない限りです・・・。

前にお知らせで書いたように3話同時投稿とはいきませんでした。なにぶん受験生なもので・・・。

こんなダメ作者の駄文でよかったら、楽しんでいただけたら幸いです。

批判・ご指摘もバンバン募集します。当然感想も。

2弾　探偵と怪人（前書き）

更新メッチャ遅れました（汗）

自分のパソコン欲しいなあ、パケホじゃないから携帯からも更新できないし・・・。

何はともあれ、『緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～』始まります

2弾　探偵と怪人

夢を見ていた

それは遠い日の幼い自分の記憶

オレの爺さん、明智小五郎がまだ生きていた頃の記憶

「爺ちゃん、オレ、いつか絶対立派な探偵になる。」

無邪気だったオレは、いつも爺さんに、そう、言っていた。

そう、無邪気だった。

その頃のオレは、努力すればきっと、爺さんのようになれると思っていた。

そんなこと、出来るかなんてわかりもしないのに。

そんなオレに、爺さんはネックレスをかけてくれた。

それは指輪をチェーンに通した、シンプルなものだった。

「これは君にこそ相応しいのかもしれないね」

爺さんは何処か哀し気に笑いながら、続ける。

「君にこんな運命を背負わせる私を、許してくれとは言わない。恨んでくれて構わない」

オレが一体どうして爺さんを恨んだりするんだろうか？なぁ、どうしてだよ、爺さん。

爺さんは、ただ、カナシげに、オレに微笑むだけだった。

目を覚まして最初に目に入ったのは、白い天井だった。

「知らない天井・・・じゃねぇな。救護科（アンビュランス）か」

ベッドから身を起こす。上半身はブレザーを脱がされ、ホルスターはブレザーと共にハンガーにかけてある。

「毎度のことながら、手際のいい、こっ、て、っつううぅぅ・・・！」

突然、頭に激痛が走る。こめかみを押さえて、ベッドの上をのたうちまわる。

「うぅ、うぉぇぇぇ、ゲホッ、ゲホッ、おぇぇぇぇ」

追い討ちをかけるように、今度は吐き気がオレを襲う。

これが、『アレ』を、同調《シンクロ》を使った反動（ツケ）だ。

シンクロは、簡単に言ってしまえば、一種の共感覚みたいなものだ。
全ての感覚を極限まで鋭敏化して、同調させ、そこから得られた情報を一元化し、それを処理する。
それがオレの能力、シンクロ。
まぁ、脳を酷使するから、毎回こんな目にあうわけだが。

十分ほどして、やっと落ち着いてくる。っていっても、症状が治まったわけじゃねぇんだけどな。

「にしても、なぁ」

まだ上手くまわりきらない頭で考える。
あの予告状には『初代明智より受け継ぎし指輪』と書いてあった。
ということは、

「これのことなんだろうな、やっぱり」

Tシャツの中から、指輪を取り出す。今となっては爺さんの形見となってしまった、やや蒼みがかったいぶし銀の、シンプルな指輪。

「このことだったのか？爺さんが言ってたのは」

オレの呟きは、救護科（アンビュランス）の壁に跳ね返って、消えた。

何時までも寝ているわけにもいかない。上着をひっかけ、誰もいない事をいいことに、救護室から抜け出る。幸い、頭痛や吐き気はある程度治まっている。

とりあえず・・・教務科(マスターズ)に行って報告でもしますか。

というわけで、オレは今、『武偵高三大危険地域』の1つ、教務科(マスターズ)の前に来ている。

なんで、危険地域かと言えば、武偵高の教師なんかをやっている連中がまともなわけがないからだ。

以前の職が殺し屋だとかマフィアだとか、碌な噂がない。

とはいえ、報告せにゃならん事もたくさんあるのだ。ここで立ち止まってるわけにもいかない。

オレは一つ大きな息を吐き出すと、教務科(マスターズ)のドアを叩いた。

十分後、オレは教務科の個室で、尋問科(ダキュラ)の教師である綴(つづり)と対峙していた。

「で、あんたは気を失ったというわけか」

「はい、その通りです」

一応の事情は説明し終えていた。証拠品のラジコンヘリは鑑識科(レビア)の

連中が回収してくれたらしい。

「ふうん、しかしまあ、こうも武偵(ウチ)高の生徒ばかり狙われるのも妙ねぇ」

「だけどオレ達は仮にも武偵ですよ？そんなに珍しいことでもないんじゃ・・・」

「立て続けに三件は珍しいわよぉ」

そう、ここ最近武偵高の生徒が狙われ続けてる。一件目は武偵高生徒のチャリジャック、二件目が武偵高生徒が乗るバスのジャック、んで三件目がオレのラジコンヘリ襲撃事件ってわけだ。

「まぁ、あんたの場合はちょっとばかし違うみたいだけどねぇ」

綴はそう言いながら、小さなカードを机の上に放ってよこした。それは、オレが気絶する直前に空から降ってきた、物騒でやや古風な予告状。

「あんたの事件だけは、『武偵殺し』の犯行じゃない。鑑識(レピア)科のほうでもそう結論付けられたみたいだしねぇ。こりゃ、マジで『怪人』の仕業かもね」

そう、チャリジャックもバスジャックも、『武偵殺し』のやった事だったが、オレのは違う。

オレにあんなことをしかけてきた野郎は、『怪人二十面相』

自分で言ってて恥ずかしくなる気分だな、怪人だなんて。けど、事実は事実。

オレの爺さんである明智小五郎。彼は優れた推理力、洞察力、運動能力、その他諸々の技能を併せ持った、戦後の日本における武偵のはしりのような存在だった。

そんな彼に対しての生涯の宿敵（ライバル）こそが、件の『怪人二十面相』ってわけなのだ。

「しっかしまぁ、あんたも先祖関係で苦労するねぇ」

「はぁ、まぁ、でも何時襲撃してくれるかはご丁寧に教えてくれてるみたいなんで、まぁ、何とか」

もっとも、怪人ご本人かどうかなんて怪しいもんだがな。爺さんと闘った怪人は、爺さんとの戦いの末に、死んだはずだ。

おおかた名前だけ騙ってオレに一発ふっかけたい奴が、仕組んだ悪ふざけだと思うがな。まぁ悪ふざけにしちゃ度が過ぎる気はするけど。

まぁでも、ご丁寧に相手は襲撃してくる日を教えてくれている。用意しとけば、相手が誰だろうがまずむざむざとやられはしないはずだ。

「ま、用事はそれだけだ。あんたもとっとと授業に戻りな。まぁ、別にさぼっても構いはしないけど」

教師たるものが何言ってんだか。単位落としたら卒業できないだろうが。でもなぁ、まだ頭は痛いし吐き気はするしで、正直ふらふらなんだよなぁ。

今日ぐらいは休んでもいいか。寮にでも戻ってさっさと寝ちまおう、それに限るな、うん。

「じゃあ、今日はもう、寮にでも帰ることに・・・」

そこまで言いかけたとき、なんの前触れもなく個室のドアが開いた。

「・・・失礼します」

失礼だと思っている口調には全く聞こえなかった。オレはその声を発した闖入者を見る。

女の子　だった。髪は青みがかって見えるほど黒く、メガネをかけていて、面立ちには、そこはかとなくプライドの高さが滲みでている。

なるほど、さっきの発言が彼女のものだったというのはかなり納得のいくことだった。

「・・・もう、よろしいでしょうか」

彼女は綴にそう問いかける。対して綴はといえば、

「ん？あふぁ、別にもういいよ」

早速怪しげなタバコを燻らせて、涅槃の向こうに旅立たれておいでだった。大丈夫かよ、あらゆる意味で。

「・・・では」

そう言うと彼女はオレの腕を掴むと、強引に引っ張り始めた。って、

「ちょ、ちょ、ちょっと！なぁ！何なんだよいったい！？」

オレの質問は鮮やかにスルーされる。抵抗しようにも、今のオレは満身創痍の状態だから、どうしようもない。

「ちょっと待てって！ストップストップ！！」

教務科（マスターズ）を出た廊下でまでオレを引きずって、やっと彼女は止まった。

「・・・なんだ？」

簡潔かつ冷静な問いかけ。だがな、

「それを言いたいのはこっちだっての。オレをどこに連れてく気だ？」

「・・・救護科（アンビュランス）だ」

「なんでさ」

「・・・貴様はまだ安静にしていなくてはならない身だろう」

貴様、ときたもんだ。まったく、さっきまでの物言いといい、武偵には変人しかいないのかね。

・・・オレもその中に入っちまうじゃねぇか、それだと。

「そらぁ、そうかもしれんけど、てことは何か？君は救護科（アンビュランス）の生徒か？」

「・・・そうだ、救護科（アンビュランス）2年、遠藤藍理（エンドウ アイリ）、今回の貴様の担当だ」

なるほどねぇ、だから急に居なくなっちまったオレを探してたわけだ。今回ばかりはオレが悪かったかな。書置きでもしとけばよかったな。

ん？でもなぁ、

「よく救護科（アンビュランス）には世話になってるけど、オレ、君に見覚えないぞ？」

最近は減ってたものの、オレはよくシンクロ使っては救護科（アンビュランス）に担ぎ込まれてて、そこの生徒は殆どが顔見知りだ。そのなかに彼女はいない。

「・・・私は転校してきたばかりだからな」

「そっか、まぁ、手間かけさせちまって悪かったな。すまない」

「・・・それだけなら、行くぞ」

再びオレを引きずろうとする彼女―――遠藤。

「いや、その必要はねぇよ」

「・・・？」

「これは寝てれば治まる症状だからさ、いっつも起きたら勝手に寮に戻ってたんだよ。だから救護室に戻る必要なんてないのさ」

「・・・」

納得してくれたのか、腕を放してくれる遠藤。オレは彼女に背を向けて、学校の玄関の方へと歩き出して、

「おっと、そうだ」

遠藤の方に振り向く。

「・・・？」

首を傾げている遠藤に、オレはポケットから取り出したチ〇ルチョコを手渡す。

「はい、これ。迷惑かけたお詫びだ」

脳を酷使する能力を持つので、その負担軽減のためにいつも甘いものを持ち合わせている。甘味はいい、リリンの産み出した文化の極みだ。

「・・・施しなどいらん」

「そんなんじゃねぇって、お侘びとお礼だよ」

そういって受け取らせると、オレはこんどこそ玄関の方へと歩き出す。

「世話してくれてサンキュ、そんじゃあな」

後ろに手を振りながら、オレはその場を後にした。

2弾　探偵と怪人（後書き）

弾篭め　後書きコーナー（仮）
お気に入り3件ですって。ありがたい限りですよ、こんな駄文をそれでも楽しみにして頂けるだなんて。

さて、今回は二人目のオリキャラが登場しました。どうなるかは・・・ある程度しか決めてません（オイ

まぁ、鈍亀更新なので、長〜〜い目で見守って頂ければ幸いです。

3弾　邂逅（前書き）

驚くほど長く書けてしまった。
ちょっとダラダラした文になっていそうですごく不安です。
温かい目で見てやってください。

それでは『緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～』、始まります

3弾　遊逅

朝、カーテンの隙間からの日差しで目を覚ました。

しかしよく寝たな、今回も。部屋に戻ってきたのが大体午前の１１時だから、そっから寝たとすると、１９時間くらい寝てた計算になる。毎度毎度我ながら良く寝れるもんだぜ。

いつもより早く起きてしまったから、学校に行くまでには相当な余裕がある。まずは顔でも洗って目を覚ますとするか。

替えのタオルを持って、洗面台に向かう。

この部屋に住んでいるのはオレ1人だ。他にもう2人いたが、転科したので今はもういない。まぁ、オレが所属している学科、強襲科（アサルト）は死傷率Ｎｏ．１の学科だからな、他の学科に移りたくもなるだろう、珍しいことじゃない。流石は『明日無き学科』。

顔洗うと、ほどいていた後ろ髪をゴムで束ねてひっつめにする。肩甲骨辺りまで伸ばしてあるが、良く邪魔じゃないかと言われる。ほっとけ、オレの自由だろが。

鏡で顔を見て、健康状態をチェックする。顔を見るだけでも体の状態が分かるとは、救護科（アンビュランス）での授業で習ったことだ。あちこちの学科を自由履修するのも、結構役に立つものだ。

顔色・・・問題なし。青ざめてたりはしない。

舌の色・・・問題なし。綺麗なピンク色だ。

眼・・・問題あり、眼つきが悪い。隈が濃い。

って眼つきはもともとだって！生まれつき！

ヤが付く職業に間違えられるほどじゃないけどな。でも悪い。武偵というより犯罪者だ。こればっかりは大人しく諦めるしかない。

さて、身だしなみも整えた事だし、

（朝飯でも作るとしますか）

フライパンがジュージューと音を立てている。焼かれているのはスクランブルエッグ。

コンロにかけられた鍋の中身は、玉ねぎとわかめ、それと豆腐の味噌汁だ。

テーブルの上には既によそわれた白いご飯とこんがりと焼かれた鮭が並べられている。

味つき海苔を出しておく事も忘れていない。

体のことを考えてサラダもしっかり用意してある。まさに、

（完璧だ・・・）

朝日に映える食卓。そこに並ぶ料理たち。湯気を立たせる味噌汁と白米。匂い立つ鮭の香ばしい香り。まさに正しい朝の姿がここに・・・！

まぁ、ただ朝飯作っただけなんだけどな。早いとこ飯を食ってしまおう。

食器を片付けて、着替える。

左脇のホルスターにデザートイーグルを、右脇のホルスターにはＳ＆ａｍｐ；ＷＭ２９、通称「４４マグナム」を差す。

腰の後ろの横向きホルスターにはグロック１９を差し、それに付属している鞘にナイフをこれまた差し込む。

両足首には投げナイフのホルスターをくくりつけ、右の手首にはワイヤーガン付のブレスレットをつける。

・・・こんなに装備するのは強襲科（アサルト）はおろか武偵高でもオレだけだろう。こんなだから『動く兵装ラック』だの、『歩く武器庫《ウォーキング・アーモリー》』だのと言われるんだろうな。

その他にも諸々の暗器を仕込んでいく。いつもはこんなに仕込んだりはしないが、あの事件があった後だ、用心しておいて損はないだろう。

防弾仕様のブレザーを羽織って、最後にネックレスを首にかければ、

朝の準備は終了だ。さてと、いい時間だし、学校へ行こう。

東京武偵高等学校、通称武偵高は、レインボーブリッジの南方に南北２ｋｍ、東西５００ｍにわたって浮かぶ人口浮島（メガフロート）――人呼んで学園島の上に建っている。

いくら武偵を育てる高校とはいっても、オレ達は飽くまで高校生なのだ、４時間目までは普通の高校と同じ授業がある。５時間目からは専門科目の実習だ。単位を落としたりなんかしたら卒業できない、それは非常に困る。

昨日は土曜日だったが、武偵高側が通常授業の単位取得のための講座を開いてくれる予定だった。

オレは強襲科（アサルト）の依頼を出来るだけ受けるつもりでいるから、なるべく早く通常授業の単位を取得しておきたかった。学校がそのチャンスをくれるというなら、利用しない手は無い。

もっとも、昨日は朝あんなことがあったから授業は受けられなかったわけだが。もったいないことしたもんだ。くそっ、怪人のヤローめ。

とは言うものの、オレは頭が悪いわけではない、寧ろ平均偏差値が５０を越えないここ武偵高において偏差値６０前後というのはかなりいい方だ。でもま、気持ちの問題だ。ちゃんと勉強してないと落ち着かないんだよな。

（実はオレって勤勉？）

そんなことを考えながら無事だった自転車を漕ぐ。バスは滅多に使わない。交通費節約だ。

日曜日である今日も、本来なら授業はないのだが、嬉しいことに今日は生物の単位取得のための講座があるらしい。受けておけば多少授業にでられなくても問題なくなる。

なんにしても、心置きなく依頼ををうけられるようにするためだ、気合入れていこう。

駐輪場に自転車を停めて、講座の行われる視聴覚室へと向かった。

「では、今日はここまでです。プリントは教卓の上に出していってくださいね」

生物の非常勤講師であるイケメン、小夜鳴先生が授業の終わりを告げる。

講座の内容は分かりやすく簡単だったので、単位が貰えること確実だ。ホントにありがたい。

（にしてもこの後どうすっかだよなぁ）

時間は未だ１０時半。これ以上は講座もない。ありていに言って暇だ。

（射撃訓練でもしとくか？）

そんな考えをおもい浮かべながら歩いていると、廊下の先に人影を見つけた。あれは確か・・・遠藤、そう、遠藤藍理だ。

「よう」

「・・・貴様か」

オレの呼びかけに一つ間をおいて応える遠藤。というか、貴様って・・・どうなんだろうか？

「どうしたんだ、そんなとこ突っ立って」

「・・・貴様には関係の無い事だろう」

とりつく島もないとはこのことか。

「気になるんだよ、休みの学校に来て廊下に突っ立ってるなんておかしいだろ。救護科（アンビュランス）の当番か？」

どの学科でもというわけではないが、休日に呼び出されて仕事させられることなんか珍しくもない。

「・・・貴様には関係ないと言った」

愛想ないなー、友達いないんじゃないのか？でもま、なんか当番な

のは図星らしいな。ん？なんか手に持ってるけど・・・あれは薬のリスト、か？

「もしかして足りない薬品取りに行きたいんじゃないのか？」

「・・・・・・」

うつむいて答えない遠藤、どうやらこれまた図星らしいな。するとなにか、ここに突っ立っていたのは、

「薬品庫の場所がわかんない、とか？」

「・・・！！」

声を出さないまま体をビクッとさせ、ワナワナと震えだす。うつむいたままだから顔はみえないが、悉く図星を突かれたのが悔しかったのか恥ずかしかったのか。

どっちにしてもこのまま放置しておくのもスッキリしないしな、よし！

「オレでよければ案内してやれるぞ、薬品庫」

そう提案するオレを、訝しげに上目遣いで睨む遠藤。おかしいな、異性からの上目遣いって普通されてドキドキするもんじゃないのか？居心地悪いんだけど。

「・・・貴様は強襲科（アサルト）の所属だったはずだ。薬品庫の場所など知っている道理はない」

「オレは強襲科(アサルト)に所属してこそいるが、一通り全ての学科を自由履修で修めてんだよ。当然救護科(アンビュランス)でも実習はしたし、その時に薬品庫にも行ってる。どうだ？知っている道理があるだろ？」

「・・・」

黙ったまま睨み続ける遠藤だったが、納得したのか、ため息を一つつくと、

「・・・では、案内を頼む」

やや不本意そうにそういったきた。

薬品庫への道中

「・・・そういえば貴様、全学科自由履修していると言ったな」

「ああ、まだどの学科も完全に修めたわけじゃないけどな」

さっきも言ったように、オレは全ての学科を履修している。まあ、専攻学科(アサルト)以外は全部CからBのマイナスぐらいのランクくらいしか

ないんだけどな。

ちなみに強襲科（アサルト）でのランクはAだ。真面目に依頼受けてたからな。

「・・・何故そんなことをしている？一つを極めたほうが楽だろうに」

「・・・・・色々あんだよ」

オレは答えをはぐらかした。他人に聞かせるようなものでもないからな。

本当の理由なんて簡単だ、一言で言えば、オレには爺さんほどの才能がないからだ。

明智小五郎は非常に高い洞察力・推理力を有し、格闘術から、果てはヘリの操縦までするマルチ振りを発揮した。しかも、どれも高いレベルで。

ところが、孫であるオレは、いくつかの例外を除けば、凡才の人間でしかなかった。

そんなオレが手っ取り早く、『立派な探偵』とやらになるにはどうすればいいか。

オレが出した結論は『広く、浅すぎず、ある程度深く』というものだった。

要は色んなことを一定レベルまで身につけよう、ということだ。
技量の凡庸さをオールマイティさでカバーする。
これがオレが考えた、爺さんに追いつくための方法だった。
武装を山ほど持ち歩くのも、どの距離でも対応できるようにと、あらゆる武器の扱いを習得したが故のことだ。大抵の武器なら問題なく扱う自信がある。
凡人でしかないオレが、『明智小五郎』という高みに至るには、こうするしかなかったのだ。

その後はお互いに無言のまま、もくもくと歩く。暫くしてから、やや大きな扉の前に着く。ここが薬品庫だ。
「よし、鍵を開けてくれ」
「・・・？」
頼むオレに対し、それまでとうってかわって無防備に不思議そうな表情を浮かべる遠藤。何を言っているんだって顔だな。
「いや、だから鍵、無いと開けられないだろ、扉」
薬品庫には当然のことながら鍵がかかっている。開けるには教務科(マスターズ)

にある鍵が必要なんだが・・・

「・・・・・・忘れてたとか言うか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

重苦しい沈黙はどうやら肯定みたいだ。しかしこうも図星ばっかりだと申し訳ない気がするな、別にオレなにも悪い事してないけど。

「・・・・・・（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ）」

前言撤回。遠藤の背中に黒いオーラが・・・。もっとオブラートに包むべきだったか。

「と、とりあえずオレ、鍵とってくるわ」

ここにいちゃいけない。本能に従い、教務科（マスターズ）へと駆け出す。

遠ざかるオーラは既に殺気の域へと達していた。

――――――数分後

「で、何が足りてなかったんだ？」

薬品庫の中、傍らの遠藤に問いかける。ありがたい事に戻ってくる

頃には殺気（オーラ）は収まっていた。よかった・・・。

「・・・」

ところがぎっちょん、何も機嫌が悪いのまで治ったわけではないらしく、遠藤は無言でリストを渡してくる。充分怖いんですが。

「そ、それじゃオレは上から3つを取ってくるから、残り頼むな？」

「・・・（コクッ）」

黙ったまま頷く遠藤。素直に話を聞いてくれるのはいいが、

（激しくやりづれぇ・・・）

不機嫌さは変わらず、それを一身に受けるなんてこと、オレには出来ない。早々に薬品棚の間に逃げ込む。

さて、やるからにはさっさと終わらせてしまおう。幸い何回か来たことはあるので、ある程度の薬品の置き場所は心得ている。

結構な高さのある棚を開けて、ラベルを見ては目当ての薬品かどうか確認していく。

それほど時間をかけることもなく、探していた薬品はあっさりと見つかった。取りあえず遠藤と別れた場所に戻る事にする。

しかし遠藤の姿はそこになかった。まだ探してるんだろうか？

辺りに注意を向けてみると、

「ん・・・ぅん・・・・んぁ・・・・・ふぅん」

妙に艶めいて色っぽい、端的に言えばエロい声が聞こえてきた。何してんだ一体！！

おそるおそる声のする方を覗き込む。そこには・・・

「んしょ・・・んん・・・ふぅ・・・せっ、やっ、はっ」

必死になって背伸びをしている遠藤がいた。

何故だろう、ホッとしたのにガッカリした自分がいる。

にしても、何をして・・・あぁ、目当ての薬品に届かないのか。この薬品棚、無駄に高く作られてるからな、女子には厳しいかもしれないな。

「せいっ、たぁっ、とぅっ・・・」

諦めればいいものを、背伸びを必死に続けている。半ば呆れた感じでみていると、

「あっ・・・・・・」

背伸びでバランスを崩し、後ろに傾く遠藤。背後には当然のごとく薬品棚がある、このままいくとマズイ。

（いわんこっちゃない・・・！）

駆け出して、咄嗟に抱きとめる。間に合ったか。

「ったく、何やってんだよ、おま、え・・・」

思考停止。今オレの眼前にあるのは、頭だけで振り向いた遠藤の顔。

鎖骨の下まで伸びた髪は艶やかで

ややきつめだった眦は、今は戸惑ったように緩められていて

プライドが高そうとか思っていた生真面目そうな顔立ちは、その実意外なほど愛らしく整っていて

支えた肩は折れてしまいそうなほど華奢で

（コイツ、実はすごく可愛い・・・？）

意識し出した途端に心臓の鼓動が跳ね上がる。やっべぇ、顔が真っ赤になってるのが自分で分かる。

（これなんてギャルゲー？）

あ、遠藤の顔もどんどん赤くなってら。というか、俯いてプルプル震えて・・・なんか嫌な予感。

「・い・・んに・・・！」

「は？」

「いい加減に離してぇーーーーー！！」

「ぐぼぉ！！、あぐぁ！！」

肘打ちで抉り込むようなボディブロー、体勢を崩したとこに鋭いアッパーカット。強襲（アサルト）科の格闘教本に載せたいほど見事なもんだった。

「あっ、がぁ、ぐふぅ」

ヤバイ、ヒザが笑ってる、まともに立ってられない。綺麗に入ったもんなぁ。てか、遠藤口調が変わってなかったか？

「・・・・・・（プルプルプルプルプル）」

「な、なぁ、落ち着けって、な、わざとじゃなかったんだって、オレが悪かったから、な？」

未だに真っ赤で小刻みに震える遠藤を宥める。まぁこういうときには、なんであれ男が悪いのだ。誠心誠意、謝ることとする。

その後、完全に宥めるのに２０分かかったのはきっとどうでもいいことなんだろう。ああ、きっとそうだ。そうに決まっている。

「これでよし、と」

ところ変わって救護室。オレは薬品を棚に並べていた。それもたった今終わったところだ。

「こっちは終わったぜ」

「・・・そうか」

別な棚に並べていた遠藤に声をかけるが、相も変わらず素っ気無い返事が返ってくるだけだ。

すぐに遠藤も並べ終えてしまった。もともと薬品自体はそんなに多くはなかったのだ。

「・・・・・・」

さっきのことがあって気まずいかと思っていたが、遠藤の態度は変わらなかったので、オレも特に気にする事なく対応できた。

もっとも、あっちから話しかけてくることなんて無いに等しいんだ

けどな。今も黙りこくってるし。
気まずくは無いが、間が持たない。
「じゃあオレ、帰るわ」
「・・・そうか」
もうオレがすることは何も無いし、居ても邪魔なだけだ。そろそろ昼時だし、部屋に戻って飯でも食うか。
「そんじゃあな、遠藤」
後ろに手を振りながら出て行こうとするオレに
「・・・藍理だ」
かかる声があった。
「へ？」
「・・・私のことは藍理と呼べ」
なにこれ？もしかしてフラグでも立てたのか？
「・・・『遠藤』は他にも多い、誰のことだか分からなくなる」
あぁ、そういうことか。まぁ、ありふれた名字だしな、言いたい事はわかる。

「・・・それと、今日は、その、助かった、お前には礼を言わねばならないな、あ、ありがとう」

どもりながらも礼を言ってくる遠藤――もとい、藍理。やっべぇ、コイツのこういう仕草は異常に可愛いな。

「い、いや、気にすんなよ、な、じゃ、じゃあオレは行くぜ、じゃあな、あ、藍理」

オレも思わずドキドキしてしまって、どもりながらも挨拶だけしてさっさと部屋を出る。

くそっ、名前呼ぶのすら躊躇しちまうくらい緊張しちまった。とりあえず落ち着こう。深呼吸だ。スー、ハー、スー、ハー。

・・・ふう、やっと落ち着いた。なんか妙に緊張しちまったぜ。

廊下で深呼吸して突っ立ってたら只の変人だ。とっとと寮に帰ろう。

（そういえば、『貴様』じゃなくて『お前』になってたな、さっき）

いくらかオレに対して柔らかくなってくれたということか。そうだったら嬉しいんだけどな。好き好んで人に嫌われたくはないし。

・・・『貴様』と『お前』って実際にはどっちがキツイ言い方なん

だろうか？

――――――翌日

月曜日なので今日は普通に授業があった。いつも通りに登校して授業を受ける。

ついでに同じクラスの武藤にこの前の件で礼をいっておくことにした。

「この前は助かったよ、サンキュな武藤」

「いいって、いつものことだろ？」

一年のときにぶっ倒れたオレを運んでくれてたのは武藤だった。まぁ、コイツ身長たかいし、ガタイもいいしな。

「にしても・・・キンジ、どうしたんだあれ」

ふと眼を向ければ、どこか上の空のクラスメイト、遠山キンジが見えた。

キンジとは同じ中学――神奈川武偵中からの知り合いで、オレや武藤とよくつるんでいる。

いつも昼行灯ではあるが、今日はそれに輪をかけてボーっとしてんな。

「バスジャックのせいじゃねぇか？あれは俺もひどい目にあったぜ」

そういえばのバスジャックのとき武藤はバスに乗ってたんだよな。キンジも救助作業に出たって聞いたし。

でも、ひどい目にあって落ち込んでるって感じではないよな。どうしたんだろ？

まぁ、『武偵は自立せよ』との言もある。無闇に詮索するのはよすか。

結局キンジは授業が終わって携帯を見るなり猛ダッシュで教室を出るまで、上の空のまんまだった。

ダッシュするなんて、悩みが解決でもしたのかね。

オレもさっさと部屋に帰りますか。

そんなことを考えていると、唐突に携帯が鳴った。着信元は

（理子？）

クラスのムードメイカーの峰理子（バカ）だった。そういえば今日は出席してなかったな、アイツ。

メールにはこの前の襲撃の件の情報がまとまったから受け取りに来

て欲しいとあった。

情報処理能力だけはAランク並みなんだよな、理子って。教務科(マスターズ)に頼まれたのはアイツだったのか。

（にしても何で学園島の外なんだ？）

まぁ、理子相手に細かい気にしても無駄か。スクーターでも借りてくか、結構遠いし。

スクーターに乗って暫く（免許は車輌(ロジ)科の自由履修で取った）、指定の場所に着いたが

（空き地ってどうだよ？）

本当にここでよかったんだろうか？

「やっほーソーくん。理子りんに会えなくて寂しかったでしょ、でしょでしょ？」

「寝言は寝て言え、理子」

「むう、ひどい、皆理子に冷たいんだー、ちぇー」

すね始める理子。まあ邪険にしたのは悪かったかもしれないが。

「で？」

「『で？』って？」

質問に質問で返してくる理子。

「いや、だから情報、まとめたのをくれるんだろ？」

「あー、あれウソだよ」

・・・は？

「本当はソーくんに会いたい人がいるんだよね」

「会いたい人？」

「そ、出てきていいよー」

理子が後ろを向いて呼びかける。そこから出てきた奴の姿に、オレは目を見張った。

黒いマントを羽織り

顔には白い仮面を着け

漆黒の衣装に身を包み

そいつは現れた。

「この人がソーくんに会いたがってた」

理子は振り返りながら

「『怪人二十面相』だよ」

本当に楽しそうに、嗤った。

3弾　邂逅（後書き）

弾篭め　後書きコーナー（仮）

ナニコレ？

これなんのＳＳだっけ？ホントにアリア？

そんな感じでラブ臭漂う本編でした。

ついカッとなって書いた、今は後悔してる、てか、書いてて恥ずかしかった～～～～！！

ま、でも次は戦闘の回なので。というか戦闘シーン書けるんだろうか、俺。

頑張ってはみますが期待しないで待っててください。はぁ、不安だなぁ・・・。

さて、今回はここでオリキャラの簡易設定を載せてみようと思います。

明智蒼志《アケチソウシ》

明智小五郎の孫。強襲科ランクＡ

身長１８２ｃｍ

髪型はひっつめでやや長髪。

顔立ちは細く、眼つきが悪い。イメージとしては男臭い早乙女アルト。

能力・・・同調《シンクロ》
全ての感覚を極限まで鋭くして、共有させる能力。体調によって制限時間が変わる。大抵は数分～１５分。

顔に反して温厚な性格。努力を厭わない性分である。甘いものが大好きで、常に持ち歩いてないと落ち着かない。家事は中学の時１人暮らしだったため得意。祖父に対してややコンプレックスを持っている模様。本人曰く『凡人』。

遠藤藍理《エンドウアイリ》

身長１６３ｃｍ
顔立ちは怜悧で、髪を肩まで伸ばしている。イメージは、綾波＋長門を柔らかくした感じ。

とっつきにくい性格で、物言いが高圧的。最近転校してきたばかりらしい。デフォルトでドジっ娘とメガネの属性が装備されている模様。一応本作のヒロイン・・・かな？

こんな感じで作っております。半分は行き当たりで出来ているけど・・・。

4弾　序曲の始まり　―L' apertura del preludio―

遅れて誠に申し訳ございません！！

ですがその分ボリュームたっぷりに仕上げました！！

あぁ、自分のＰＣが欲しい・・・

受験生だというのになにやってんだろ、俺

そんなネガティブは置いといて、『緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～』、始まります。

4弾　序曲の始まり　―L' apertura del preludio―

「この人がソーくんに会いたがってた」

「『怪人二十面相』だよ」

理子が楽しそうに笑う、哂う、嗤う、ワラウ。その笑みはどこか蠱惑的で、同時にこの場にひどく似つかわしくないものだった。

「どういう・・・ことだ、理子」

「どーいうことってぇ、つまり理子りんは怪人ちゃんのな・か・ま、ってことだよ♪」

睨みつけながら、やっとの思いで口に出た問い。しかしその問いに応える声は、どこまでも明るい。

異常にあって常にある異常。魅力的にすら思える理子の微笑みは、その実本能に働きかける恐怖を伴っている。

「ふざっっっっけんな！！要はテメェ、武偵高にスパイに来てたってことだろ！？皆騙しといて挙句にこんな舐めた真似しやがって、ただじゃすまさねぇぞ！！」

しかしそれにオレが感じたのは、憤り。クラスであんなに楽しそうに過ごしてて、皆に愛されてて、でもコイツは、それをあっさり裏切りやがった。

恐怖よりもまず、怒りにも似た感情が腹の内からあふれ出す。目の

前に居るのが敵だとか、そんな事が些細な事に思えてさえくる。
ただただ、ひたすらに腹が立って・・・悲しかった。
友達だと思っていたんだ、ついさっきまで。それがこうして敵になるなんて、思いもしなかった。

「ん～～、それについては理子りんにも複雑怪奇な事情があるのでありますよ、明智君。まぁでも～、一つぐらい特殊な事情のある女の子を攻略する方が萌えない？」

「っっっっ！！いい加減にしろよテ「その辺にしておいて頂けないかね？」ちっ！」

ふざけた言動を続ける理子を怒鳴りつけようとして、黒い影に邪魔をされる。

死神にすら見えるソイツは、理子の前に立ち、優雅に一礼をする。

「初めましてだね、三代目明智君。改めて自己紹介をさせて頂こう。『怪人二十面相』。巷ではそう呼ばれている者だ。会えて恐悦至極だよ」

芝居がかった口調と物腰、何回も聞かされた怪人の特徴そのままだ。

「理子くんをあまり怒らないでやってくれたまえ、彼女に君の案内を頼んだのは私なのだ」

どこまでも穏やかな物言いだが、やはりこの状況でこうしていられるのは異常だ。

寧ろ敵であるオレに丁寧である事自体、本来有り得ることじゃない。手練れなのか、狂っているのか。両方だったら厄介だ。

「君の怒りも分かるが、理子君にも事情というものがあるのだよ。どうか許してやってくれたまえ」

「そうそう♪女の子には秘密がいっぱいなのだ～」

「それに今日君に用があるのは彼女ではなく、この私だよ」

言うなり二十面相が纏う雰囲気が一変する。どうやらお喋りはお終いってことらしいな。

オレも懐に手を入れて、臨戦態勢をとる。身に纏う空気が訴えてくる。コイツ、相当な手練れだ・・・！

「じゃあ理子りんも用事あるし、もう行くね。二人ともガンバ！！」

「なぁ、理子」

改造ベスパに乗って去ろうとする理子に、ためらいながらもオレは声をかけていた。

どうしても、聞いておきたいことが、あったから。

「どうして、どうしてオレたちを裏切ったり、したんだ？」

搾り出すように出たのは、そんな単純な問い。でも、オレはどうしても聞いておきたかった。

理子が、あんなに楽しそうに過ごしていた理子が、全部偽りだったなんて、演技だったなんて思いたくなかったから。

「どうして、か・・・」

やや翳りを滲ませた声で理子は呟く。それは、普段絶対に見ることの無い理子の姿だった。

「ねぇ、ソーくんは誰？」

「は？」

意味の分からない問いに困惑するオレ。しかし理子はそのまま話を続ける。

「だからぁ、あなたという人間は何者ですか、って聞いてるの」

噛み砕いて説明をする理子。一瞬だけ考え込みそうになるが、答えはすぐに出た。

「オレはオレ、『明智蒼志』だ。それ以上でも以下でもねぇよ」

どんな要因や因果があろうがオレがオレ自身であることに変わりは無い。だからあっさりと答えられた。

「・・・そう、やっぱソーくんはそう言うんだね。武偵でもなく、『明智』の後継者でもなく、か」

翳りの中に何故か羨望を含ませたような表情で言葉を紡ぎ、一つ間

を置いて理子はまた語りだす。

「確かにソーくんはソーくんだよ。普通は皆そう。自分以外の何者でもない。でも理子は」

――――――――――――チガウ

背筋に冷や汗と共に悪寒が伝う。

その言葉に篭められた感情は

あるいは憧憬（あこがれ）であり

あるいは羨望（うらやみ）であり

あるいは諦念（あきらめ）であり

あるいは嫉妬（ねたみ）であり

あるいは憤怒（いかり）であり

あるいは憎悪(にくしみ)であり

あるいはそれら全てだった。

「理子はまだ『理子』じゃない、自分になれてない」

淡々と言葉を紡ぐその様子が、余計に寒気を感じさせる。

だが、だ。

オレは戦慄すると同時に、理子の気持ちが少し理解できた気がした。

勿論、他人の気持ちなんてわかりっこない。けど、どこかで見た気がしたんだ。

自分の存在意義が見えなくて、必死で足掻いてる、そんな姿。

オレの思考を置き去りに、理子は凄みのある口調で高らかに宣言する。

「だから私は今日!!『私』になる!!曾御祖父様ですら引き分けた、あの『オルメス』を倒して!!

私は『私』になるんだ!!」

その瞳に映るのは、歓喜(きょうき)。そしてオレは理解する。

（あぁ、コイツは昔のオレにそっくりなんだ）

偉大な曽祖父、実力の無い自分、周りからの蔑み。

自分が自分でないような、そんな感覚。

今でこそなんでもないフリができているが、耐え難いものだった。

更にオレは、理子の言葉に内包された事実を理解した。

『オルメス』

それはフランス語であり、それはとある探偵の名字を意味する。

その探偵の名は、『シャーロック・ホームズ』

『オルメス』はフランス語で『ホームズ』を指す。

「フランス、『ホームズ』、引き分けた、か」

考えるまでも無い、そんな条件に当てはまる人物なんてこの世でオレは1人しか知らない。

「理子」

自分でもちょっと信じたくないが、おそらくは。

「お前は・・・『リュパン』の一族の人間だな？」

『アルセーヌ・リュパン』

フランスの大怪盗であり、かつてホームズと引き分けた人物。条件にぴったりだ。

理子は心底面白そうに笑みを浮かべている。

「そしてお前の目的は、『ホームズ』の４代目、神崎・Ｈ（ホームズ）・アリアを倒す事、そうだろ？」

一応、仕事柄情報には敏感なので、ヨーロッパでブイブイいわせた超有能武偵が東京武偵高校に転入してくると聞いて、ある程度の情報は集めておいた。

当然、その超有能武偵とやらは神崎のことだ。

というか、日本の高校（一応）にホームズとリュパンの子孫が揃い踏みだなんて、冗談みたいな話だぜ。

しかも、片や常識知らずのワガママチビ美少女に、片や能天気系のギャルゲマニア美少女だぞ、誰が彼の有名な偉人の子孫だと思おうか、いや、思いはしない反語。

「当ったり～♪でもちょ～～っと足りないかな？理子はただのアリアを倒すことが目的じゃないんだよ？」

普段聞きなれた口調に戻って、楽しそうに微笑みながら答える。

『ただのアリア』が目的でないとしたら、一体どんな神崎が目的なんだ？

考えろ、理子の言葉にヒントがある筈だ。思い出せ、理子はなんて言っていたんだ？

（・・・待てよ、『曾御祖父様ですら引き分けた』？その時の状況に持っていった状態で倒したいんだとしたら・・・）

「パー・・トナー・・か？」

オレの呟きに笑みを深める理子。どうやら当たりみたいだな。だとすれば・・・、

「改めて聞くぞ、お前の目的はパートナーと、『遠山キンジ』と組んだ神崎を倒す事、だな？」

ここ最近キンジが良く神崎に付き合っている（纏わりつかれている）のは周知の事実だ。それすら予め意図されていたものだったとすれば、辻褄が合う。

「ん～～～大っ正解だよ！！すごいよソーくん、どうしたの？なんかに目覚めちゃったの？ニュータ〇プ？それともイノベ〇ター？」

「一応これでも武偵だぞ？これぐらい当然だ」

「で、どうする？理子を止める？」

「いや、ムリだろ、この状況で。それに・・・」

「それに？」

「それだけの理由があるのに、止める気にはなれねぇよ」

それはオレの偽らざる気持ち。例え犯罪に当たろうがなんだろうが、『理子』と言う人格を構成する上で大事な過程。

ならばそれを邪魔する気は、ない。それに、さっきから笑っている理子を見ていると、どうしてもそんなに仕出かすようには思えない。神崎やキンジと戦っても、流石に9条を破ったりはしないだろう・・・多分

「あ～ぁ、なんか調子狂っちゃうなぁ。あっと、もうそろそろ行かないとヤバイや。今度こそ理子りん行くね」

改めてバイクに乗り直す理子。ふと、たった一つ、どうしても聞きたい疑問が湧いた。

「理子！！最後に一つ、わざわざ質問に答えてくれたりなんかしたんだ？」

本当なら無視して走り去ったって良かった筈だ。急ぐようになるくらいだったら、オレに構う必要なんてなかった。

理子は若干きょとんとして微笑みながら、普段浮かべる悪戯っぽい笑みを浮かべながら、答えた。

「それは・・・・・・・・・・・・・・・ヒ・ミ・ツ」

あぁ、やっぱり理子は根っこは飽くまで理子のまんまだったんだ。これなら少しは安心できる、さっきの『多分』は取り消してもいいだろ。

走り去っていく理子を見て、そんなことを考えている自分がいて、思わず口元が緩む。

が、すぐに引き締める。

「さて、待たせて悪かったな、え～と、怪人？」

そう、オレは怪人と対峙したまんまで理子と話していたのだ。

「二十面相、で構わんよ。なに、気にする必要は無い。疑問が浮かぶのも至極当然だ。・・・もっとも、5分もこの臨戦態勢のまま放って置かれるとは思わなかったがね」

うっ、そこはかとない罪悪感がこみ上げてくる。というか、そのままの態勢で待ってるなんて、律儀と言うかなんと言うか。

「まぁ、そんなことはもう些事でしかない。さぁ、正々堂々決闘といこうではないか、明智君」

踏み込むように前傾になる。が、

「ちょっと待った」

敢えて止めさせて貰う。度々でなんだか非常に心苦しいんだが、どうしても聞きたい事がある。

「なんだね？そろそろ私も辛抱の限界なのだが？」

若干の苛立ちを含んだ疑問。それでもこれだけは聞いておかないと。

「別にお前と戦うことに関してどうこうってわけじゃねぇ、因縁があるのはよくわかってる。聞きたいのはただ1つ」

この場を揺るがしかねない言葉が、オレの口から紡がれる

「今日はまだ、二日目なんだが・・・・・」

「は？」

「いや、だから、今日は三日目じゃなくて二日目なんだが・・・」

そう、オレが予告状を手にしたのが土曜日、そして今日は月曜日。
誰がどう見ても二日目だ。

ディスプレイの前の皆は気づいてたよな！？

・・・誰に向かって喋りかけたんだろうかオレは。

「ふっ、何を言っているのだか。私は予告状を書くに際して三日目を計算して・・・」

「ちょいまて、『書くに際して』？オイ、書いたのは襲撃前日、なんていわねぇよな？」

「・・・・」

「図星かよ！！」

つまり、オレ→襲撃のあった日から三日目。二十面相→書いた日＝襲撃前日から三日目。

とこんな風なズレがあったわけだ。実はあっちも緊張してんのか？予告状の日程を間違える二十面相なんて、前代未聞だろうに。

なんか、やる気が削がれた気が・・・。

「・・・その事に関しては謝罪しよう。しかし、私のやる事は変わらん。さぁ、」

そんなオレの心境をよそに、纏う空気は殺気を帯び、遊びは終わり、今度こそ本気だということを告げる。

「始めようか！因縁深き我らの戦いを！！」

戦闘の火蓋が今、切って落とされた。

薄暮れた夕闇に、剣閃と発砲炎（マズルフラッシュ）が煌く。それはまるで、夕空に輝きはじめた星のようで、幻想的にすら見える。

しかし、それらを作り出す当人たちにはそれに見惚れるような余裕などありはしない。

弾き、撃ち、蹴り上げ、打ち込む。どちらも流れるようでありながら、込められているものは鬼気迫るもの。

蒼志は今回グロック１９を持ち戦いに臨んでいる。対する二十面相は寸詰まりの西洋剣、刀身の幅広いブロートソード。剣撃と銃撃の応酬が続く。しかし、均衡はそうそう続くものではない。

徐々に蒼志が押され始める。

何も剣に対して銃だからというわけではない。事実、防刃仕様を活かし、襲い掛かる剣閃をきっちりと弾いている。では何故か？

一撃があまりにも重過ぎるのだ。普通に考えれば寸詰まりの剣に然して重さがあるわけもない。おまけに、使い手の二十面相にも、それほど力があるとは思えない。蒼志が見たところ、華奢であり身長もやや低い。

しかし、そこから繰り出される一撃は、紛うこと無き必殺の重みを持ったもの。どう考えても不利だった。

距離をとる為に、剣撃に合わせて後ろへと下がる。弾き続けた左手は既に痺れはじめている。痣も３つや４つではすまないだろう。

（くそっ、接近戦に持ち込まれたらマズイ。けん制で様子見をするか。）

引き金を引けば、音速に達するほどの速度をもった鉛の塊が射出され、一直線に敵のもとへと飛翔する。が、

「ふっ！！」

あっさりと避けられる。この時代にＴＮＫ製防弾服（ツィストナノケブラー）を着ていない犯罪者などいない。故に中距離からの射撃は当たればよし、そうでなくてもけん制ぐらいにと蒼志は考えていた。

しかし、弾丸が放たれてから到達するまでの時間など刹那よりもなお短い。実際には避けられるとは到底思えなかった。

驚愕の隙をつかれ、肉薄される。皮一枚でかわすが、態勢を崩す。腹に重い蹴りが決まり、後ろに転がりながら受身を取ってなんとか立ち上がる。

おかしい。比喩抜きであの体から繰り出されたとは思えない蹴りだった。動き一つ一つのスペックが高すぎる。

（一体なんだってんだ！あんなのそう何回もかわせるとは限んねぇぞ・・・！）

所詮蒼志の身体能力など鍛えたとはいえ常識の範囲内だ。目の前の相手のように常軌を逸しているわけではない。

限界などいずれそう遠くなくやってくる。

そんな思考の隙を見逃すほど、蒼志に相対した敵は優しくも間抜けでもなかった。

「しっ！！」

裂帛の気合と共に二十面相の手からスローイングナイフが投擲され

る。

「ちぃっ！！」

咄嗟に右へと跳ぶ蒼志。が、

ババババッ！！

迫りくる銃弾の群れ。敵の手にあるのは剣ではなく、黒塗りの銃――――連射の可能なグロック１８Ｃ。それもロングマガジンを装填したタイプ。

「くうっ！」

身を捻り、どうにか更に右へと跳ぶ。避けきったかに思えた。

が、だ。

「なっ！？」

眼前には白い仮面がアップになって迫る。

愕然とした気分でそれを見る蒼志。こうもあっさり懐に入られるとは思いもしなかった。

そんなことにはお構いなしに、二十面相はこれまた有り得ない威力の蹴りを放ってくる。

両腕をクロスさせて防ぐが、それを物ともしない衝撃に吹き飛ばされる。

「がっ、あぁぁぁぁぁぁぁ！！」

受身を取ることも出来ず、這い蹲りながらなんとか立ち上がる。

今の攻撃

まず弾速の遅いスローイングナイフでけん制

続いてそこにナイフより弾速の速い銃弾を発射、更に体勢を崩す

最後に自分が体勢を崩した相手に突撃。仮に相手が避けようとしても、崩れた体勢と、自分自身が弾丸となり、臨機応変に対応できる事により確実にダメージを与える。

単純だがそれゆえに対処しがたい、驚異的な瞬発力があってこそ成立する力技。

「あれをまともに喰らって立ち上がるとは、いやはや大したものだ」

戦闘の苦い緊張を孕みながらも、若干の余裕をすら垣間見せる二十

面相。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」

対して余裕など微塵も存在していない蒼志。彼我の差は圧倒的だった。

しかし、この程度で諦めるほど人間ができてはいない。

さっきの攻撃で気になったことがあった。

攻撃を喰らった瞬間に聞こえた、「バチッ」と言う音。そして今、蹴られただけにしては痺れすぎている両腕。

そこから導き出されるのは、

「超能力者（ステルス）、それも電気使い（エレクトロマスター）かよ。全く、いくらなんでも分が悪すぎんだろ」

「ほう、よくわかったね明智君、とでも言っておこうか。本当に君の勘の良さには驚嘆せざるを得ないよ。これでも極力隠していたつもりだったんだがね」

文字通り電気を操るのが電気使い（エレクトロマスター）。これならば全てに説明がつく。

驚異的な瞬発力と身体能力は体内電気を操作しての身体制御

腕の痺れはインパクトの際に通電されたことによる感電

（ったく、どこのビリビリ（レールガン）中学生ですかってんだ）

「しかし種がわかったところで君が避けられるわけでもないだろう？降参しろとは言わないが、もはやつんでいるとは思わないかね？」

未だに余裕を崩さない二十面相。だが、蒼志は右の口の端だけ吊り上げ、不敵な笑いを顔にはりつけていた。

「？なぜ笑っているかは知らないが、私もおいそれと長居するわけにはいかないのでね、次で終わりにさせて貰うよ」

闘気を隠しもせずに放つ敵に相対しながらも、笑みは崩れない。無造作に上着を、暗器の塊たるブレザーを脱ぎ捨てる。

簡単なことだ、確かに今の蒼志で勝てない。なら、今の蒼志で闘わなければいい。

勝てる自分で闘えば、いい。

眼を閉じ、外界からの干渉を完全に遮断する。

深呼吸を、深い深い深呼吸を一つ。

体中に神経を行き渡らせる感覚をイメージする

研ぎ澄まされていく感覚

広がっていく世界

腕の痛覚をカット。痺れと鈍痛を意識から除外

ゆっくりと眼を開き、最後に視覚をリンクさせる。

同調(シンクロ)・・・完了(コンプリート)

「さぁ・・・終幕(フィナーレ)だ!!」

先ほどと同じく、ナイフを投擲、そして銃弾が迫る。

だが、

「はぁぁっ!!」

バリバリバリ!!

右手から放たれる銃弾でナイフを撃ち落す。同時に、

「ふっ!!」

「な」

ほぼ同時に左手で腰から引き抜いた特殊警棒を縦に薙ぎ、銃弾を叩き落す。

「だが！！」

信じられないほどの速度で懐に入り込んでくる二十面相。

その手にはグロック１８Ｃが握られている。

拳銃格闘（アル＝カタ）を仕掛ける気らしい。しかし今の蒼志にそれがひどく遅く感じる。

「せっ！！」

ババババッ

「なにぃ！？」

上半身をスウェーさせて弾丸をいとも容易く流す。

「しっっ！！」

同時に左手の警棒を逆手で一閃、攻撃に転じる。

「くっ！」

慌てて避ける、が、しかし、

バウッ！！

「なっ！？」

同時に右手の銃から鉛弾が放たれる。驚愕の声が上がる。

銃弾は右腕を掠める。

「っっ！！貴様ぁっ！！」

激怒とともに再び仕掛ける二十面相。だが、またもあしらわれる。

仕掛ける、あしらわれる。

そんな予定調和なやり取りが何合、何十合と続く。しかしやはり、そう長くは続かなかった。

押され始めたのは黒衣の怪人。

「くっ、こん、な・・・！」

まるで別の生き物であるかのように自在に動く両手に翻弄される。

左右の手足を完全に独立させた行動がとれる。これがシンクロの副次効果として生まれた、蒼志の数少ない強み。

しかし、使えば使うほど脳を酷使することになる。できればこちらもあまり使いたくない代物である。

「くぅぅぅ！」

遂に自ら距離をとった。思わず一つ息をつく怪人。だがその安堵の息は早すぎるものだったと気づく。

パシュウ！！

射出音とともに蒼志の右手首からアンカーが撃ち出され、怪人の右腕に巻きつく。

驚愕とともに二十面相は理解する。

自分は誘導されたのだ、と。

奴が暗器をしこたま仕込んでいるのは知っていた。故に上着を捨てたのを見た時、もうその心配は無いと、少しでも思ってしまった。

しかし、現にこうして暗器での攻撃を受けている。結果として自分は嵌められたのだ。

そんな後悔を他所に、力一杯引かれるワイヤー。疲労した二十面相の体で耐えられるはずも無く、あっさりと蒼志のもとへと引き寄せられる。

「はぁぁぁ！！」

なんとか体勢を整えてカウンターを加えようとする。

しかし、

「せっ！！」

繰り出した拳は紙一重でかわされる。代わりに腹部にあてがわれる、銃口。蒼志の右手にはいつの間にかＭ２９が握られていた。

ドズン！！

鈍い音を響かせ、狩猟用の大威力の銃弾が黒衣の襲撃者の腹部にめり込む。

アル＝カタとは拳銃を使った格闘である。

ならば重いストレートをぶち込みたいのなら、高威力の弾丸を叩き込む。蒼志の編み出した基本戦術の一つだった。

「ぐふぁぁ・・・！！」

吹き飛ぶ怪人。立ち上がりこそしたものの、疲労困憊といった様子だ。

「ゼェ、ゼェ、ゼェ」

対して蒼志も、先からの戦闘と無茶なアル＝カタで疲弊しきっている。

しばし睨み合いが続くが、電子音によってそれは唐突に終わりを告げる。

「くっ、理子！？撤退！？そうか、リミットか・・・」

小型の端末を取り出し、溜め息をつく二十面相。

「悪いが時間だ、決着はまたの機会に持ち越しだな・・・非常に不本意だが」

その声には押し殺せない憤りが込められていたが、怪人は背を向け歩き出す。

「待て、どうしてオレを、オレの指輪なんかを狙う？」

どうしても分からなかった事、そしてこの戦いの原因となったこと。

それが聞きたかった。

「どうして、だと？」

返される言葉に込められるは、濃密なる殺気。

「その指輪はもともと初代が持っていたものだ！！それを貴様の祖父が奪ったのだ！！」

怒声により紡がれる信じがたい言葉。

「ちょっと待て！そりゃどういう・・・」

「もう話す事などない。どうしても知りたいのであれば・・・『イ・ウー』。この言葉でも覚えておくのだな」

そう吐き捨てると、怪人は何かをこちらに投げてくる。

（フラッシュグレネード！！）
咄嗟に腕で目を覆う。感覚が鋭くなっているところにこういう攻撃は厳しい。
「・・・ではまた、会えることを祈って」
呟きとともに、閃光が炸裂した。

「くっ、逃げられたか」
オレが目を開けると、そこにはもう誰もいなかった。
追いかけたとしても、マントと仮面脱がれちゃわかりっこない。
にしても、なぁ。
『その指輪はもともと初代が持っていたものだ！！それを貴様の祖父が奪ったのだ！！』
（なーんでそんなもんをオレに託すかね、あの爺さんは）

それに、去り際に二十面相が口にした『イ・ウー』

（・・・謎と疲労と弾丸の出費が増えただけだったな）

若干鬱になりかけたとき、携帯に着信が入った。武藤からだ。

「おう、どうした武藤。疲れてるから手短に・・・」

『それどころじゃねぇ！！』

電話口から怒鳴り声が聞こえる。耳が痛い・・・。

「疲れてるのがそれどころ扱いか、いくらなんでも・・・」

『黙って聞け！！』

ここに至ってオレはようやく只ならないことが起きてる事を理解した。

「・・・どうした」

武藤は一呼吸置いてから、

『キンジとアリアの乗った飛行機が不時着しようとしてる』

そう、告げた。

（くっそ～～。なんだってこんな立て続けに！）

スクーターを飛ばし、一路武偵高校へと向かうオレの胸中は苦いものので一杯だった。

十中八九、この事態には理子が絡んでる。

ならばこの事態を引き起こした人間をオレは事前に逃した事になる。

（畜生、オレの信頼を返せーーーー！！）

現在、キンジ達の乗るＡＮＡ６００便は都内を低空飛行している。

空自のＦ－１５Ｊ（イーグル）に撃墜されるのを防ぐためらしい。

被害を広げないためという理屈は理解できたが、流石に納得まではできなかった。

これからＡＮＡ６００便は使われていない人工浮島、『空き地島』に着陸するそうだ。

しかし、滑走路としては、最低限必要なものが足りない。

夜間着陸用の明かりだ。

武藤は皆に、装備科（アムド）のライトを持って空き地島までくるように呼びかけている。

オレも当然協力することにした。断る気はもとより微塵もなかった。

ダチは助ける。

武偵憲章第1条に『仲間を信じ、仲間を助けよ』とあるしな。
スクーターを乗り捨て、装備科(アムド)から大型ライトを担ぎだし、車輌科(ロジ)の船着場へと向かう。
何故か、懐中電灯を持った連中が大勢溜まっていた。

「どうした」

「船はあるんだが、動かせる奴がいないんだ。車輌科(ロジ)の連中は皆もう行っちまって・・・」

すかさずオレは接舷している船に乗り込む。鍵を探す暇はないので、コードを引っ張りだし、端と端をつなぎ、無理矢理エンジンをかける。

「早く乗れっ!!」

呼びかけるとそれまで動けずにいた連中があっという間に乗り込んだ。

乗り終わったのを確認し、舫をといて発進する。

焦る気持ちを押さえ、慎重に、だが、できるだけ速く船を走らせる。

空き地島にはすぐに着いた。所詮大した距離じゃない。

降りだした雨のなか、すぐさまライトの設置にかかる。キンジ達が来るまでそう時間はない。

丁度設置を完了したころ、巨大な機影が夜空の向こうに見えてきた。ＡＮＡ６００便だ。

エンジンはいかれているが、胴体にはあんまり異常がないみたいだ、少し安心した。

「キンジ！見えてるかバカヤロウ！」

隣をみると、武藤がＢｌｕｅｔｏｏｔｈでキンジに怒鳴りかけていた。

「お前が死ぬと白ゆ・・・・・いや、泣く人がいるからよォ！オレ、車輌科（ロジ）で一番でかいモーターボートをパクっちまったんだぞ！装備科（アムド）から懐中電灯（マグライト）も、みんなで持ち出してきたんだ！全員分の反省文、後でお前が書け！」

あちこちから、同じような呼びかけが続く。てか、懐中電灯でよかったのか・・・。

「――――キンジ！」

「機体が見えてるぞ！」

「後少しだ！」

「もう少し頑張りやがれッ！！」

あいつら確か、バスジャックにあった奴らじゃねぇか。情けは人の為ならず、てか。

「キンジ！！ひとが疲労困憊でこんだけしてやったんだ！！しくっじったら承知しねぇぞ！！」

オレも携帯からキンジに声援を送る。うまくやれよ・・・！

やがて飛行機は着陸態勢に入る。誰もが固唾を飲んで見守る中、ランディングギアが接地する。

（このままじゃ滑走路が足りない！！）

その速度にオレは嫌な予感を感じる。しかし、それは鮮やかに裏切られた。

なんと機体は発電用の風車に向けられ、激突、見事にその動きを止めた。

（なんて無茶を・・・）

思わず頭を抱えたくなる気分でいたところに、横から武藤に抱きつかれる。

「やったぜ！！見たか！？大っ成功だ！！」

「あぁ」

はしゃぎまくる武藤に、オレも笑みが浮かんでくるのを抑えられなかった。

なんにしても、あの様子じゃキンジ達は無事だろう。ホントに良かった・・・。

と、思考できたのもここまでだった。

（あ、ヤベェ・・・）

体を襲う御馴染みの脱力感。無理もねぇ、ここまでずっとシンクロ状態だったんだ。

「武藤」

「ん？なんだ？」

「後、頼むわ」

「な！？オイ、蒼志！！しっかりしろ！！」

武藤の怒鳴り声をＢＧＭにオレの意識はブラックアウトした。

序曲は奏でられ、役者は出揃った。

緋と蒼の楽譜は別の音を奏でながらも、１つの曲を紡いでいく。

その曲の行き着く先は、何処か。

その答えはまだ、誰も知らない。

4弾　序曲の始まり　―L' apertura del preludio―

弾篭め　（後書きコーナー）

まず最初に

すみませんでしたっっ！！！！

更新が遅れてしまい大変申し訳ございません。何分忙しい身（？）でして・・・。

そのせいなのかお気に入り登録１４件までいったのが、お１人解除してしまったらしく、投稿時現在１３件です。解除された方、見捨てないで～～！！（泣）

ともあれ前回の2倍以上！！嬉しい反面、ちょっと、いいのかな？なんて思ったり。

まあ、読んでいただけるのは非常に光栄なことですが（^○^）／

さて、今回は、くだらない伏線と作者初挑戦の戦闘シーンでしたが、どうでしたか？ご満足頂けたなら感想を、ここがダメ、というご意見がありましたら感想へ。

ぶっちゃけ、感想なくて若干悲しいんですよ・・・。

まあ楽しんでいただけたならそれで充分です。ここまでお読みくださった方（実は今回のは初の一万字越えだったのです）ありがとうございます＞（——）＜

祝砲　ＰＶ５０００記念《主人公紹介》

突然ですが不肖雲英、昨日投稿してすぐに、ある事に気づきました。

「ＰＶが５０００アクセス突破してるだと！？」

えぇそうです。投稿してから気づいたんです・・・。

ということで、４弾でできなかったＰＶ５０００アクセスのお祝いをしたいと思います～♪やったねハイマキ！！

しかしまぁ、たった（？）二ヶ月でこれだけの方に見ていただけるとは・・・。皆さんにご満足いただけていればいいんですが（汗）

思えば二ヶ月とちょっと前、この『小説家になろう』を偶然にも見つけてしまったこと、いや、昨年のある日、とある信頼すべき友人から『緋弾のアリア』を紹介されたことが、今回に繋がっていると思うと、人生って数奇なんだなぁ、とか考えたり。

まぁおかげで、受験生らしからぬことしかやってないんですけどね・・・。

さて、お祝いといっても特に何も思いつかないので、ここは安直に作品・主人公の設定なんかをご紹介しようかな、と思っています。

まずは主人公こと明智蒼志から

明智蒼志（アケチ ソウシ）

東京武偵高校２年強襲科所属

ランク：強襲科Ａ（ただし、専攻する強襲科以外でもランクを保持。Ｂマイナスから Ｃ程度）

身長１８２ｃｍ　体重７２ｋｇ　体型は痩せ型筋肉質　髪型は赤みに見える薄い栗色を交えた長髪をひっつめにして背中に流している。

特技：火器全般の運用、トラップメイキング、格闘（ストライキング）、全学科の一般レベルの基礎

やや女顔で眼つきが悪い（某龍主夫の半分程度）。普段笑うときは口の端を吊り上げる皮肉っぽい笑みを浮かべる。本人に自覚がないため、初対面の場合は誤解されることも。心底嬉しい時か心を許した相手にしか皮肉っぽさの無い笑みを浮かべない。やっぱり本人に自覚なし。今の所目撃者はキンジ・武藤など特別付き合いの深い面子のみ。

口調は砕けていてあまり柄が良いとは言えないものの、根っこではかなりのお人好し。仲間に対する思い入れが強く、求められた助けを断る事はほぼ無い。

明智探偵事務所の3代目所長（予定）であり、父に『武偵は自立せよ』の精神から、都内の実家を離れ神奈川付属武偵中学在籍時に一人暮らしを命じられる。そのお陰で家事スキルは高い水準にある。

自称『凡人』であり、現在のランクを得るため、そして祖父をどんな形であれ越すため、努力を重ねてきた。努力家であり、必要な労力ならきっちりとこなす真面目さがある。勉学方面においても同様。

キンジとは長い付き合いであり、比較的中が良い。祖父に対するコンプレックスを持っていることもあり、お互いの偉人の子孫としての苦労話で盛り上がったそうな・・・。

無類の甘いもの好きで、ポケットはチョコ等でいっぱい。幸福そうな笑みは大体甘味を食べてる時に発せられるもの。

二つ名として『動く兵装ラック』『歩く武器庫《ウォーキング・アーモリー》』などがある。

特殊技能：同調《シンクロ》

あらゆる感覚を鋭敏化・共有し、それを同調させ一元化して処理させることにより、状況を完全に把握する能力。使用時間にはムラがあり、体調に左右される。尚、これによる副次効果として『身体の左右の独立行動が可能になる』というものがある。脳を一部掌握した事によるものだが、武器を多く使う蒼志とは相性がいい。副作用として、気絶後に激しい吐き気・頭痛に襲われるとともに、長時間睡眠が必要となる。

使用装備

デザート・イーグル５０ＡＥ１０インチモデル
Ｓ＆ａｍｐ；ＷＭ２９「４４マグナム」
グロック１９
特殊警棒
スローイングナイフ
その他暗器諸々

以上です。長ったらしかったですかね？いちおう大学ノート１ページ分あるんですけど。

蒼志のコンセプトは『努力する凡人―（天才）』です。設定の上ではアリアには到底及びませんし、超能力も（多分）使いません。が、努力と持てる技能でどうにかしちゃうのが彼です。器用貧乏だけどちゃんとそれの生かし方を知っているので。

蒼志のイメージは以前書いたとおりです。一応立ち絵はあるけど・・・画才がなくて。正直自信ないですハイ。

本当に最後になりましたが、読んでくださる方々に最大限の感謝を。有難うございます。
次回更新も大幅に遅れるとは思いますが、長い目で見て、首を長くしながらも楽しみにして頂ければ、書き手としてこれ以上の幸福はございません。これからもご愛読と応援のほど、よろしくお願い致します。

それではまた次回、５弾でお目にかかれることを願って。

5弾　巫女（前編）（前書き）

暑中お見舞い申し上げます。

暑いなか書いたので若干変なとこがあるかもです。

そんな拙作でよければどうぞお楽しみください。

それでは『緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～』、始まります。

5弾　巫女（前編）

懐かしい風景が眼前に広がっている。

明智家の別邸、爺さんが晩年を過ごした場所。

開け放たれた縁側からは、何かを話し合っている親父と爺さんが見える。

そう、爺さんが。

何故爺さんが生きてるのか。簡単だ、これはオレの『記憶』だからだ。幼い頃、遠い日の『記憶』。

だからこれは夢だ。

現実として爺さんはもういないし、別邸だって使われなくなって久しい。こんな光景があるわけが無い。

夢という形でのみ存在する、あの日の『記憶』。

つまらなかった。

せっかく遊びにきたというのに、大人たちは話し込んでいて相手をしてくれない。

外で遊ぼうにも地元じゃないから、他の子供たちがどこで遊んでる

のかなんて知りやしない。

第一、屋敷の外に出ちゃダメだと言われているので、どうしようもない。

いい加減一人遊びにも飽きて、いっそ言いつけを破ってでも外に出てやろうかと考え始めて。

そんな時だった。

あの子の姿が瞳(め)に入ったのは。

綺麗な子だった。

風になびいている髪は夏の照りつける日差しを反射して、煌びやかで。

幼いながらも整った顔立ちは可愛らしくて。

しかし、そんなことは当時のオレには全く意に介する必要もないこ

とだった。

もしかしたら一緒に遊んでくれるかもしれない。

もう一人遊びをしなくて済むかもしれない。

ガキのオレが考えていたのはそんなことだった。

「ねぇ、きみどこの子？」

じっと屋敷を見つめていたその女の子は、放しかけられて戸惑っているようだった。

「ボクはここに住んでるお爺ちゃんに会いに来たんだよ」

再び放し掛けるオレだったが、女の子は俯いてモジモジしているばかりだった。

だがしかし、ガキであるところのオレは、我慢の限界に来ていた。

「ね、一緒に遊ぼうよ。ボク一人っきりでつまんなかったんだ、お父さんもお爺ちゃんもお話してばっかであそんでくれないんだもん」

「あっ・・・」

半ば強引に手を引き、門の外へ

「え？あ、う～？」

混乱しかけている女の子を引っ張りながら

「まずはあっち、あっちに行ってみようよ！！」

オレは駆け出した。

夕暮れ、あれだけ高かった日もようやく傾き始めた頃

「あ～、疲れた・・・。」

オレはあれからあの子を連れまわしてあちこちを遊びまわった。

森の奥、田んぼの畦道、土管の中ｅｔｃ

二人してクタクタになるまで遊んだ。

もっとも、あの子はモジモジするばっかりであんまり積極的には遊ぼうとはしなかったが。

でも、最初にあったときのような固い雰囲気は取れている。どうも人と話すのが得意ではないようだった。

「ねぇ？楽しかった？」

ふと、あの子の横顔を見て、そんなこと聞いたの何故だったのか。

今となってはその横顔すらもはっきりとは思い出せない。

「・・・うん」

答えてはくれても、やっぱりこっちに向いてはくれない。でも、気まずい思いはしなかった。

「――――！――――！」

「あっ・・・」

遠くから微かに誰かを呼ぶような声が聞こえてきた。

「君の？」

「・・・うん、お母さんだと思う」

「じゃあ、今日はもうさよならだね」

名残惜しくはあったが、もう日も暮れて帰る時間だ。

「・・・それじゃあ、さよなら」

去ってゆくあの子の背中を見てると、

「またねーーーー！！」

なんとなくそう言っておきたくて、気がついたら叫んでいた。

驚いて振り向くあの子。でも、

「うん・・・またね」

顔はよく見えなかったけど、そう言って、笑ってくれた気がした。

名前も聞いていなかったことに気づいたのは、もうあの子の背中が消えた頃だった。

これは遠い日にあった、薄ぼんやりとした、『思い出』

目を開けると、そこは

「知ってる天井だ」

これも確かアレの中で言ってたよな、マイナーだけどさ。

まあそんなわけで、救護科（アンビュランス）の病室だ。そこ、またかよとか言うな。好きでこんな目に遭ってるわけないだろ。

しかしなぁ、毎回毎回病室でお目覚めとか、オレの右手は幻想をぶち殺したりはできねぇし、カエル顔の医者もいない・・・多分。いないよな？

体調は・・・軽い頭痛と吐き気以外は至って良好。どうやらとんでもなく長く眠っていたからそこら辺の負担が軽減されたらしいな。

今は・・・うわ、４日も経ってやがる。どおりで頭痛も吐き気も軽いわけだ。

・・・とりあえず、誰か呼ぶか、この前みたいなことになるのも困るし。

にしても、だ。随分と懐かしい夢を見たもんだ。

あの後、屋敷に戻ったオレは母さんに滅茶苦茶叱られた、笑顔で。幼いながらに笑顔というものの恐ろしさを知ったオレだった。

なんでか爺さんだけはひどく可笑しそうに笑っていた気がする。

指輪を爺さんから渡されたのは、それから数日経った後だった。

しっかりと退院（？）の手続きをとってから向かった教務科（マスターズ）で待っていたのは、黒服の厳つい連中だった。なんでもオレが怪人と戦った件について聞きたいとか。

あの飛行機をハイジャックしたのはやっぱり理子だったらしい。見逃したみたいで若干の罪悪感があったのはオレだけの秘密だ。

連中が顔色を変えたのは、『イ・ウー』の名前が出た時だった。どうもなんかあるらしいな・・・。

黒服の連中が出て行った後に残ったのは、オレと綴だけだった。

「先生、『イ・ウー』ってなんなんです？」

至極全うな疑念だろう。どう考えても『イ・ウー』ってのがキーになってるのは明らかだ。

「明智ぃ、黒服の公務員に追っかけられんのと、今の発言忘れんの、どっちがいい？」

なるほど、ね。国家レベルの機密だから黙っとけ、と。ま、忠告してもらえるだけありがたいが。機密だってことを教えるのだけでも本当はまずいんだろうし。

思った以上に面倒くさいことに巻き込まれたのかもな、オレ。

そんなこんなで数日経ち、授業から自室に戻ったオレを待っていたのは、１つの段ボール。送り主は・・・親父。

中身は・・・あれ、オレやっぱり疲れてるのかな？宅配物の欄に「拳銃」って記載されてるように見えるよ？

ん、親父からメール？なになに？『ウチの連中の銃オーバーホールしたいから文（あや）ちゃんに渡してね。宅配しておくからヨロシク☆』だって？

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ・・・・・・・・・・

「あんの脳天常夏親父ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！」

アホかぁ！！どこにノーマルの宅配便で拳銃送る奴がいるか！！しかも普通に届いてるし！？さすがＢｌａｃｋ　Ｃａｔ・・・なのか？

まぁ親父の悪ふざけにつき合わされたんだろう、無理矢理。可哀想に。明智の家の権力を悪用すんなよ、あのクソ親父。

つーか同じ送るんなら文に直接送った方がいいじゃねぇか。ホントあの親父はなに考えてんだか。

まあまだ日も高いし、さっさと届けちまおう。こんなもん見つかったりなんかしたら前科者になっちまう。

実家を継ぐ（予定）の身としては、経歴に傷が付くと色々とマズイ・・・んだっけ？

まぁ、武偵でそこら辺身奇麗な奴は珍しいらしいな。武偵高の教師陣を見てれば納得できるけどな。

とにかく、とっとと文のところ――――装備科棟（アムド）のＢ２０１作業室に行こう。

装備科棟（アムド）は武偵高のなかでも屈指の大きさを誇る。とにかくでかい。

だというのに、そこが廊下に至るまで武器で埋め尽くされているというのは、どうなんだろうか？

武偵高を象徴する光景だと言えなくもないのが悲しいとこだな。
それはともかくとして、そんな中に文の作業場はある。
「お～い、文。いるか～？」
呼びかけると、ガラクタ、もとい武器やらパーツやら工具やらが天井まで積まれた部屋の奥から、ちっこい影が跳び付いてきた。
「あはははっ！ソーちゃんなのだ！あはっ！いらっしゃいなのだ！」
「うわっ！やめろ文！！引っ付くんじゃねぇ！！は～な～せ～！」
身長の都合上オレの胸当たりに抱きついている文を引っぺがし、襟首を掴んで猫みたいに顔の前に持ってくる。いっつも思うけど軽いよなーコイツ。
「オイ、『ソーちゃん』はやめろって言ってるだろうが。それに、お前みたいなのでも一応仮にも戸籍上は女子なんだからオレに抱きつくのはヤメロと何度も何度も・・・」
「あはっ！ソーちゃんなのだ！ソーちゃんが怒ってるのだ！あはっ！あはははははっ！」
・・・疲れる。
「はぁ、ったくよぉ・・・」
文――――平賀文（ひらがあや）。装備科（アムド）所属のAランク武偵にして、江戸時代

における稀代の天才、平賀源内の子孫だ。

整備・改造の腕はピカイチでSランクレベルなんだが、違法改造も無邪気に引き受けるわ法外な料金を取るわ（違法改造に限り）で、Aランクとなっている困ったロリっ娘である。

コイツとオレの付き合いは、オレの中学時代まで遡る。その頃から武装を多く使いこなすスタイルだったオレは、種類問わずに完璧に銃やら仕掛け武器やらをオーバーホールできる整備士を探していた。当然、そんな特殊な整備士なんて探してもそうはいない。

困っていたオレだったが、親父が伝手でぴったりの整備士を探し出してくれた。聞けばオレと同い年だと言う。任せてみると完璧過ぎるくらいに仕上がっていて、非の打ち所がなかった。

その整備士というのが、文だったってわけだ。それ以来オレは、なんか知らんがコイツに懐かれてしまっている。その容姿もあいまって、オレにとっては半ば妹みたいなものだ。同い年だけど。

とりあえず文を降ろす。しっかし軽いなーコイツ。片手で持てるってどうよ？

「今日は依頼持ってきたぞ、親父からだ。ウチの武偵の人たちの銃、オーバーホールしてくれとさ」

「わかりましたのだ！しっかり仕上げますのだ！」

「料金は明智探偵事務所名義で請求書出してくれ、オレが親父に届ける」

こんな感じでも、トップクラスの腕を持ってるからこそ安心して任せられる。でなければオレも親父も武偵の命ともいえる銃を預けたりはしない。

あ、そうだ、

「なあ文、ついでにオレのDE（デザートイーグル）さ、バレルを元のに戻してくれないか？取り回しが悪くてな」

この前の近接拳銃格闘戦（アルーカタ）でわかったが、あのレベルの相手と戦うのに10インチのバレルははっきりいって邪魔でしかない。

途中でDEからわざわざグロックに切り替えたぐらいだ。

オレのもついでにバレルの取替えをしてもらおう。

「あはっ！了解しましたのだ！こっちもしっかりやらせてもらいますのだ！」

「おう、そっちの料金は取りに来たときに払うから、よろしくな」

小脇に抱えていた段ボールを降ろす。ついでにその上に乗っけていた小箱も。

「これ、差し入れだ。ケーキ、『シャングリラ』の。冷蔵庫にでも入れとけ」

『シャングリラ』は台場の方でやっている喫茶店だ。夫婦でやってるんだが、ここの奥さんの作るケーキがウマイ。武偵高でも人気だ。

ちなみにオレは当然常連で顔馴染みだ。

「いつもありがとうなのだ！」

「あぁ、じゃあよろしく頼むな」

ＤＥを抜いて机に置き、オレは部屋を出た。

さて、自分の部屋に戻るとしますか。

寮に戻ると、寮の前に軽トラが停まっていた。ん、あれは武藤と・・・星伽（ほとぎ）か。

星伽白雪（しらゆき）。武偵高現生徒会長にして、園芸部部・手芸部・女子バレー部の部長を兼務。更には偏差値７５で超能力捜査研究科（ＳＳＲ）のなかでも優秀という超優等生だ。

が、それはキンジが絡まなければの話。幼馴染であるところのキンジに女子が近づけば、問答無用の狂戦士（バーサーカー）モードに突入。女子をフルボッコするまで止まらない。

オレも何回止めに入ったか分からない。鬼道術とかいう超能力を使って身体強化もしてるからたまったもんじゃない。

閑話休題

どうやら武藤は星伽の荷物、というか家具一式を運んできたみたいだ。オイ、まさか・・・。

見てると武藤が滅茶苦茶機敏に荷物を降ろしてる。相手が星伽だからな。

でもなぁ、望み薄だと思うがな、星伽ってどう見てもキンジ一直線だし。

まぁあれだ、『人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて地獄行きだぁぁぁ！！』との言葉もある、関わらんでおこう、メンドいし。

「で・・・この後とか、ど、どーすかね。軽ぅーくお茶とかメシ――」

「あっキンちゃん！」

キンジ登場。哀れ武藤、完全スルーされてしまった。合掌。

「キン・・・遠山？」

「あ、あのね武藤くん。私、今日からキンちゃ・・・遠山くんのお部屋に住むの」

「――――き、キンジのっ？」

「言っておくが、仕事だからな。俺は白雪のボディーガードにさせられちまったんだよ。アリアのせいでな。言いふらすんじゃねーぞ」

あー、やっぱり、そんなことだろうとは思ったけどな。

「よぉ、キンジ、星伽、武藤」

あんまりこそこそ見てるのもどうかと思ったので、キンジたちのほうに近づく。

「あぁ蒼志か」「こんにちは、明智くん」「よぉ蒼志」

三者三様の挨拶が返ってくる。武藤はなんとか立ち直ったみたいだ。

「どうしたんだ一体、なんで星伽が男子寮に住み込むんだよ？」

「聞いてたろ？アリアのせいだよ。アイツが勝手に白雪のボディーガードを引き受けやがったんだよ」

なんとまぁ。あのワガママ娘がねぇ。裏があると考えたほうが妥当か。

必要以上に探る気はないが頭の隅に置いとくぐらいはしておこう。

そんなことを考えていると、キンジが小声で話しかけてきた。

「明日の放課後、ロキシーに来てくれるか？」

オレもキンジに合わせて小声で問う。

「なんでだ？教室とかじゃだめなのか？」

「アリアが聞きたい事があるらしい、この前の件絡みでな。誰にも聞かれたくないそうだ」

なるほどね。オレが理子と色々あったっていうのは筒抜けなわけか。

「わかった。じゃあ明日、放課後に」

オレはそう返すと、キンジたちと別れて自室に帰った。

はてさて、神崎はいったいオレに何を聞きたいんだろうか？

一晩経って放課後、オレは約束どおりファミレスのロキシーに足を運んだ。

「よぉ、待たせたな」

キンジと神崎を見つけ、アリアの向かい、キンジの隣に座る。

「遅いわよ、人を待たせるんじゃないわよ！」

「知るか、時間も指定してないお前が悪い。一応これでも色々忙しいんだ。それにお前らとそうズレたわけじゃないだろ？」

キーキー喚いてくる神崎を軽くあしらい、カフェ・オレを注文する。

キンジは心なしか居心地悪そうだ。可哀想に、こんなのに付き合う羽目になって、しかも部屋には大の苦手の女子が二人。あぁ、哀れだ。

「で、オレに聞きたい事ってのはなんだ、神崎」

教室じゃ神崎と話したことはない。そんなオレに話があるっていうんだ、この前の件、それも、理子について聞きたいんだろう。だが・・・、

「コホン、いいわ。教えてあげる。ソーシ！あたしにハイジャックの日にあったことを洗いざらい全部話しなさい！！」

オレはその問いに・・・

「イヤだね」

そう答えた。

5弾　巫女（前編）（後書き）

弾篭め　（後書きコーナー）

ども、お久しぶりです、雲英でございます。

更新、またも一ヶ月かかってしまいました。しかも予定より長くなってしまい、初の前後編となりました。

さて、内容のほう如何でしたでしょうか？

平賀さんが初登場！5話目にしてやっと主人公コンビとの絡み（オイラと、まぁ、蒼志の父親を出すための布石といったところでしょうか。

平賀さんを出したのは、このままだと本編との絡みが少なくなるから

父親ですが、できるだけはっちゃけたキャラにしたいと思っています。

次回は明智父が大活躍！！（ウソ）

相変わらず感想は大歓迎の熱烈募集中です。批判、疑問点、ご意見、その他もお待ちしております。

後、受験生ですので、これからは二ヶ月に一回更新できるかどうかも怪しくなります。ですがなるべく更新できるよう頑張りますので、それでもいいという方は応援のほどよろしくお願いします。

それではまた次回、後編でお目にかかれることを願いまして。

修正　６弾→５弾

普通タイトル間違えるかな・・・？

5弾　巫女（後編）（前書き）

長らくお待たせいたしました～。
気がつけば3ヶ月も経っていてびっくりしました。
そうこうしてるうちになんとＰＶが１５０００を突破しました！こんなによんでいただけるとは・・・。
この3ヶ月
アリアの新刊が発売され
アリアコミックが発売され
ヤンガンにて外伝マンガがスタート
全部買いました（笑）最新7巻の表紙がジャンヌだったことにテンション駄々上がりでした。
やっぱジャンヌ可愛ぃーーーーー！！
そんなこんなで今回もオリジナルストーリーでお届けいたします。
それでは『緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～』、始まります。

5弾　巫女（後編）

「イヤだね」

オレの言葉に神崎はあんぐりと口を開けて固まっている。

どうやらキンジも隣で固まってるみたいだ、動きが感じられない。

「な、何でよ！？いいからあたしに教えなさいよ！！」

「ヤダったらヤダね。なんでオレだけが情報提供をしなくちゃならねぇんだよ」

即座に回復した神崎が再度喚くが、何を言われようが教える気はない。

何が悲しくてこんな高飛車な態度で要求されて、タダで情報をやらなきゃならないんだ。

「いいからアンタは黙ってアタシに理子とのことを教えればいいのよ！！」

「うるっせぇなぁ、まったく」

「ア、アリア、落ち着け、座れって」

ご起立なさっていきり立っているアリアを宥めるキンジ。災難だな、

原因はオレだけど。

おっ、カフェ・オレが届いた。これ特製だからドリンクバーじゃないんだよな。うん、うまい。

「まぁ落ち着け神崎。オレは、『オレだけ情報提供するのがイヤ』であってだな、こっちの条件を呑んでくれるんならいくらでも理子とのこと、話してやるよ」

少しは落ち着いたらしい神崎を諭す。

オレが言ってるのは当然のことだろう。情報が欲しいんなら、それに見合った対価がなきゃ納得できない。仮にも武偵、そういうことを生業にしてるんだから、なおさらけじめはつけておきたい。

「そういうことは早く言ってくれ・・・」

キンジがなんか言ってるけどスルー。諦めろ、女で苦労するのは多分お前の天命だ

「わかったわ、で何が条件なの？」

神崎も納得してくれたようだ。まぁ武偵としちゃ当然だもんな。

さて、オレが出す条件というのは、昨日キンジから話があった時点でもう決めていた。それは・・・

「『イ・ウー』について知ってる事、話して貰おうか。それがオレの条件だ」

「なっ・・・・！」

「は・・・？」

絶句する神崎と呆けるキンジ。まぁ、オレの口から出るとは予想もつかない単語だろうからな、オレが知ってる筈のない情報だろうし。

ところがぎっちょん、オレは怪人から『イ・ウー』とか言うもんがあることをわざわざ教えてもらった。

これが何かの手がかりになることは、そこらのガキにだってわかる。なぜならそれを探っておく事が、またあるであろう怪人の襲撃に対しての対抗策（カウンター・メジャー）になりうるからだ。受け身ばっかというのも気に食わないし。

罠である可能性もある・・・てかその確率のほうが高いんだけどな、あの場面でわざわざ言う事もないことだったし。

どっちにしろ情報は集めといて損はない。そこで適任なのが、神崎・H・アリア。理子ともやりあったらしいし、ヨーロッパでの活躍や家の関係もあるから、『イ・ウー』について知っているとみて間違いないだろう。

「ア、アンタ、それがどういうことかわかってんでしょうね！？」

「あぁ、当然」

神崎が言いたい事は、『これは国家レベルの機密であって、知れば消される事だってあるのだぞ』ということだろう。そんなの重々承知だ。

だがな、

このままやられっぱっつーのは非常に胸くそ悪いんだよ。

増して負けたりなんかしたら、事務(じっか)所の信用とこれからにだって関わる。噂レベルでもオレが負けたなんて知られたら、実家の商売はあがったりだ。

「そう。でもね、生憎と教えたらアタシまで立場が危なくなるの。そんな危ない橋、渡れないわ。他の条件に替えて頂戴」

「理子の情報を教えるのだって相当危ない事なんだがな。一応綴と黒服の『国家公務員』サマに口止めされてるんでね、オレだってリスク承知で言ってるんだ。そっちも相応のリスクは覚悟して貰いたいな」

オレの言葉に神崎は顔を顰(しか)め、考え込む。おおかた今後のリスクと情報を計りにかけてるんだろう。

そして、

「いいわ、アタシが問題無いと判断した情報までなら教えてあげる」

「交渉成立だな。オレもそれに見合った情報を提供する」

交渉は上手くいった。さて、情報交換といきますか。

・・・キンジは殆ど空気だな。

「まず第一に、『イ・ウー』とやらがなんなのか教えてくれ」

今テーブルに座っているのは、向かい合っているオレと神崎だけ。
神崎がキンジを追い出したのだ。
当然キンジは不満気だったが、神崎の怒涛の剣幕（カンシャク）に押されてすごすご退散していった。

あぁ、哀れ・・・。

「イ・ウーはとある犯罪結社の事を指すわ。そこには各国の超人や人間離れした能力をもつ者が所属してるといわれているの」

「犯罪結社、ねぇ」

まあそれは予想通りだな。超人とかがいるって言うのは、眉唾もんだが。

「そしてその存在は各国でも第一級を通り越して特級の極秘事項よ。一般人が知る機会は、全くないといっていいわ」

「混乱しちまうからな、そんな無法者どもが野放しなんて知れたら」

妥当な対応だろうな、社会的に正しいかどうかは別として。

「ま、話せるのはこんなところかしら」

「随分と少ないな。もう少し話してくれてもいいんじゃねーか？」
「アタシも良くは知らないのよ。なにせ世界中からトップシークレットのままマークを受け続けてる組織なのよ？そうそう情報は入ってこないわ」
「そりゃそうだろうがなぁ」
「さぁ、アタシは話したわよ。次はアンタの番ね」
えぇ～～。たったこれっぽちの情報でリスク負わないとなんないのかよ。割に合わねぇなぁ。
「な・ん・か・も・ん・く・あ・る・の？」
「・・・わかった、話すから仮にも年頃の女の子が般若みたいな顔するもんじゃねぇよ！？」
花も恥らうどころか、恐ろしさに枯れちまいそうだ。
とりあえず神崎を落ち着かせ、オレは怪人との戦闘の経緯を話した。
「ふ～ん、アンタって高名な探偵の家系だったのね」
「まぁな、自慢じゃないが一応『明智』っていえば日本人なら誰でも知ってる位だな。もっとも、世界的にみたら『ホームズ』には及ぶべくもないがな」
『明智』は日本限定だが、『ホームズ』はそれこそ世界中で一番と

言っていい知名度の探偵の家系だ。

まぁそんなことはどうでもいいんだが。

「大体の情報交換は済んだわね。今日の所はこの位にしておくわ」

「そうだな」

ここいらが潮時らしいな。さっさと部屋に帰って夕飯の準備でもしないとな。

と、オレが帰ろうと席を立つと、

「それからソーシ、くれぐれもこのことはキンジには伏せて置くこと、分かってるわよね？」

と念を押してくる神崎。その顔は真剣そのものであり、

（はは～ん、ナルホドそゆことね～）

「分かってるよ、神崎の愛しのカレを危険にさらしたくないもんな♪」

かぁ～～～～～、ボンッ！！

瞬間湯沸かし器もビックリの速度で真っ赤になり、口をわぐわぐさせている赤い子ライオンが一匹。

・・・・・・しっくりき過ぎだな、子ライオン。キンジも上手いこと言うもんだな、ホント。

さて、と。

「これ、オレの分の代金な。あとヨロシク～♪」

カフェ・オレの代金をテーブルに置き、神崎が爆発する前にロキシーから逃走する。

『覚えてなさいソーシ！！絶っ対風穴空けてやるんだから！！』

バウバウバウっ！！

後ろの方から子ライオンの咆哮とか銃声とかが聞こえたのは気のせいだろう。

うん、そういうことにしておこう。

しかし、あの神崎がキンジを、ねぇ。まぁおそらく、あの状態を見られちまったんだろう。

キンジの、遠山一族の秘奥、『ヒステリア・モード』を。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム

通称『ヒステリア・モード』

遠山家の血筋のみが受け継ぐ、身体、情報処理、反射、全ての能力を加速（ブースト）する切り札。

正直、俺には羨ましくて仕方ない能力だ・・・能力自体は。

実はこれ、発動条件と副作用がとんでもないのだ。

まず第一に、発動させるためには、『性的に興奮しなくてはならない』。

・・・信じられないかもしれないが、本当だ。

そもそも、ヒステリア・モードというのは、男の種族保存本能、特に『異性を守る』というのが異常に発達したものらしい。

副作用というのも、そこに関係している。

使用後は睡眠が必要となるというのは、まだいい。オレの『シンクロ』も同じだ。

問題はもう1つの方。

ヒステリア・モード時、キンジは異性にとって魅力的な自分になろうとする。

簡単に言ってしまえば・・・恐ろしくキザなジゴロになってしまう。

甘い言葉を囁くわ、極度のフェミニストになるわ、クサイ台詞で口説くわさりげなく触るわ・・・。

そんな具合になってしまう、実際にオレも見たことが何回もある。

中学ではそれを女子に知られ、いいようにこき使われていたのは、キンジの人生でも大きな苦難の１つだったのだろう。

高校に進学する時、オレが同じく東京武偵高に進学すると聞いて、キンジはヒステリア・モードの事を黙ってくれるようにと頼んできた。

当然オレはそれを引き受けた。余りにも必死だったのも、思わず頷いてしまった原因の１つだったのはここだけの秘密だ。

だが、そんな努力も虚しく、神崎にはバレてしまったらしい。

おそらく詳しいことは気づかれてはいないだろうが、それでもヒステリア・モードを見られるぐらいはしてしまったのだろう。

でなければ、神崎がキンジに惚れる要素が見当たらない。

・・・いや、別にキンジが男としてどうとか昼行灯がどうとか素面のときは頼りないとかそう言うことが言いたいわけでも・・・ない。ないったら、ない。

ただ、どこか禁欲的（ストイック）で『恋愛なんてくだらない』とか言ってた神崎を惚れさせるには、それ相応の何かが必要だというだけだ。

それがヒステリア・モード。

好きでなったわけじゃないだろうに（キンジはヒステリア・モード時の自分が死ぬほど恥ずかしいらしい）災難なことだ。

キンジの女難に深い深い憐れみを感じつつ、オレは自室へと足を向

けた。

あぁ、哀れな仔羊(キンジ)に救いあれ・・・。

そんなことがあって数日、オレは実家へと向かう道中にあった。

キャリーバックに入っているのは、文が仕上てくれた銃が詰まっている。

職質されたら一発アウトだ。

それでもオレ自身が運んでいるのは、宅配便で送るよりはよっぽど良いということと、もう1つ、爺さんについて聞きたいということがあるからだ。

この前の襲撃が爺さんに関係あるのは明白、ならば親父に聞けばなんらかの手がかりくらいは得られるかもしれない。

そういう思惑があってオレは、放課後の専門学科の履修を蹴って一路実家へと向かっている。

特にする事もないオレは、歩きながらもここ数日の違和感について思索をめぐらせてみる。

違和感は、星伽についてだ。

例えば女子更衣室の前で。

更衣室から出てきた星伽は、なぜかオレを避けるようにその場を足早に離れていった。

その後、友達と話しながら歩いてくる星伽とすれ違ったが、特にいつもと変わりはないように見えた。

例えばとある昼休み。

温室でなにやらアンニュイな表情を浮かべている星伽を見かけた。

その直後、校舎の中で星伽の後ろ姿を見かけた。

どうも腑に落ちない。

星伽とオレは決して仲が悪いわけではないし、温室から戻ってきたにしては、速過ぎる気がする。

何か引っかかる。だが、いま一つ確信が持てない。

そんなことをに頭を捻っているうちに、目的地に着いた。

『明智探偵事務所』

正月に帰省して以来の、久しぶりの実家。

爺さんが築き、親父へと引き継がれた明智の城。

とりあえず今親父が居るであろう所長室へと向かう。

「蒼志くんお帰りなさい」

「久しぶり、蒼志」

「いよぉ、お帰り、どうした？」

ウチの所員の人たちがオレに声をかけてきてくれる。

ガキの頃から家と隣接している事務所（ココ）には頻繁に出入りしていた。

みんなとは顔見知り以上の存在だ。家族に近いものがある。

所長室のドアを前に、一つ息をつく。

開けたくはない、開けたくはないが・・・仕方ない。

コンコン「失礼するぞ、親父」

ノックをし、ドアノブに手をかける。

ドアの向こうには・・・

「ウェ～～～ルカムバ～～～ックホ～～～ムマイサ～～～ン！！」

「せいやっ！！」

「ぐっふぅ！！」

宙を飛んでくる暑苦しい中年だった。

「親父ぃ、いい加減毎回毎回抱きつこうとするんじゃねぇぇぇぇぇぇ！！」

「ふぅ、腰の入ったいいヤクザキックだ。腕をあげたねぇ、蒼志」

そう言いながら立ち上がり、笑顔を見せるのが何を隠そうオレの親父。

明智探偵事務所二代目所長、明智雄四郎（ゆうしろう）

息子のオレから見てもオールバックにした髪型といいたくわえられた口髭といい、絵に描いたようなナイスミドルだ、鼻血と髪の乱れと顔の靴跡がなければだが。

「全く、恥じらいっつーもんを覚えろアンタは。その歳にもなって自分の子供に飛び掛ったりする親なんていねぇーよ。ホントにしまいにゃシバキ倒すぞ」

「むう、久々の親子の対面だというのに蒼志が冷たいよ海空（みそら）さん」

「あらあら、蒼志さんも雄四郎さんとのスキンシップも程ほどにしておいてくださいね」

お盆を両手で持ちながら穏やかに言ってくる、どこか上品な立ち振る舞いの秘書然とした若い女性。

信じられないかもしれないがこの人こそがオレの母さん、母親、母堂、産みの親。明智海空その人なのだ。

相変わらず実年齢をガン無視した外見だ。女子大生でも通りそうだ。
ちなみに親父は母さん一筋だ。なんでもどこぞのお嬢様だった母さんの護衛任務で一目惚れ、熱心な親父の態度に母さんも惹かれて・・・ということらしい。正直聞き飽きてるんだよな、親の惚気なんて聞くに堪えるもんじゃない。

しかもそれが本当なら、親父は護衛の基本「対象と深い仲になることなかれ」を真正面から堂々と破ってることになる。何してんだよ、ホントに。

「いや、しかし本当にご苦労だったね。わざわざウチのみんなの銃運んできてくれて」

身を整えつつソファへと腰掛ける親父。オレも対面に座り、

「そう仕向けてきたのはそっちだろう？回りくどいことしなくても来ようと思ってたのに、普通それだけのために拳銃を宅配するか？」

そう、当然のことだが拳銃を送りつけるなんてバカみたいな真似する必要性は皆無。目的は別にあった。

つまり、

「僕が愛しいマイサンに会いたかった、それ以外になにか重要な事があるかい？」

ということなわけだ。

「で、多分そっちが聞きたい事とこっちが聞きたい事は一致してる

と思うんだけど？」

さっきの発言はそろそろ本題にも入りたいのでスルーするとして、

「『怪人二十面相』。コイツについてなんか知ってたりしないか？」

親父がわざわざオレを呼び寄せ、オレがわざわざ実家に帰ってきた理由。

それは偏に『怪人』からの襲撃があったからということに他ならない。

「そのことなんだけどねぇ、蒼志、本当に『彼』は怪人だと名乗ったんだね？」

「あぁ、そう言うのを確りと聞いたぞ」

「そう、か。だとしたら厄介だねぇ」

「ん、なんでだ？」

「『怪人』はねぇ蒼志、君のお爺さん、つまり僕の父さんが死闘の末に倒し、その時に死んだという事になっているんだ」

わずかに眉を寄せたまま親父は言葉を続ける。

「今の怪人が本人だという可能性は皆無だろうが、その一族が、というのは有り得ない話じゃない。こういうのはウチみたいな『家』の宿命みたいなものかな？」

「要するに、まだまだ狙われる可能性がある、と」

「まぁ、そういうことになってしまうね」

わかってたことだけどな。活躍＝なにかしらの恨みを買う。

それに・・・

「アイツは言ってた、オレが持ってる指輪に、爺さんがくれた指輪に用があると。それは爺さんが、初代の怪人から盗んだものだ、って」

そう、ヤツは予告状にも書いていた。オレの指輪に用がある、と。

「指輪、か・・・」

「親父、爺さんはこの指輪について何か言ってなかったのか？」

親父は暫し黙りこくると、静かに首を横に振った。

「わからないね。その指輪を渡したのは父さんの考えだったからね、僕には何も教えられてはいないんだよ」

「そうか・・・」

手がかりなし、か。

まぁないもんはしょうがない。せいぜい次なる襲撃に向けて、準備と警戒をきっちりとして置くしかないか。

「わかった。用件はこれだけだし、じゃあオレはこれで帰るわ」

「あぁ、蒼志ちょっと待ってくれ。アドシアードの時は・・・」

「挨拶まわりだろ？分かってるよ」

アドシアードとはいわば武偵のオリンピック。全国や各国から武偵、武偵企業なんかが集まる一大イベントだ。今年は我らが東京武偵高で開催されるのだが、オレは跡継ぎという立場上、関係者のお偉方に挨拶と顔見せをしておかなくちゃならない。ちなみにヘルプとしては武器一式の使用法の実演披露と、最終日のパレードでのバックバンドでのギターをすることになっている。

「それならいいんだ、気をつけて帰るんだよ？」

「あぁ、またな親父、母さんも」

親父と母さんに見送られ、オレは所長室を後にしたのだった。

このときオレは知る由もなかった、アドシアード当日に待ち構えているもの、ここ数日の違和感が示すものがなんなのかを。

「本当に、あれでよかったんですか？雄四郎さん」

「今の段階で蒼志に教えるのは、父さんとの約束を反故にすることになってしまうよ」

「でも、もしあの子に何かあったら・・・」

「今は信じよう、海空さん。父さんが決めたことだ、きっととても重要で意味があることなんだ、父さんにとっても、僕らにとっても、そして・・・蒼志にとっても。それに・・・」

「蒼志は僕らの息子だよ？ちょっとやそっとでどうにかなる程、僕の息子は甘くないよ」

5弾　巫女（後編）（後書き）

弾篭め　後書きコーナー

まずは毎度の謝罪を・・・すみませんでしたーーー！！
イメージが湧いてこなくて書けませんでした。いわゆるスランプですね分かります。

折角前書きに書いたようなことがあったのに、アイディアが浮かばず停滞しちゃいました。ホントにごめんなさい。

しかも別作品にまで手を出しちゃいました、テヘ☆
やめてください悪いとは思ってますだから石を投げないで！！

なんにしても書ききれて一安心です。更新はもしかしたら卒業までストップするかもしれませんが、更新できるうちは更新したいので、もう一方の方も合わせてよろしくお願いします。

6弾　魔女（前書き）

お久しぶりの投稿です。

いつも通り長め&クドめですが、楽しんで頂ければ幸いです。

6弾　魔女

「せやぁぁぁ！！」

―――パァンッ！

気合と共に振るわれたナイフの腹を裏拳で弾き、その遠心力をそのままに

「しゃらぁぁぁぁ！！」

「げふぅぅっ！！」

回し蹴りを一閃。1人を吹っ飛ばす。と、後ろから殺気。振り返れば、鉄パイプ振りかぶった男が。

―――ガゴンッ！

鈍い音とともにパイプが抉ったのは、地面。そこに既にオレの姿はない。

「これでラストォォォォーーーー！！」

振り落とされた腕を掴み、そのまま背負い投げ！！

ドォン！という音とともに男の体が地面に叩き付けられた。

オレの周りには他にも倒れている男が数人。さて、こんな状況でオレが何をしているかというと・・・。

「実演の生徒の皆さん、ありがとうございましたーーー！！以上で『護身術講座』の実演を終了します。見学の皆さんも最後までの見学、どうもありがとうございました」

そう、今日はアドシアード1日目。オレは特設ブースの中において、護身術の実演ということでほかの強襲科の面々と模擬的な戦闘を行っていたわけだ。

「いってーーー。蒼志、テメェ本気で投げるヤツがいるかフツー」

「ワリィな、後でなんかおごるから許してくれよ」

「俺にもだからなー。回し蹴りって・・・。手加減を知らんのかお前は」

「OK全員に奢ってやるから安心しろって」

そう言うと組手をしてくれたエキストラ役の生徒が歓声をあげる。ちょっと出費は痛いが、まあこれぐらいはしないと申し訳ないし。役的にオレが一方的に倒す役だったからなあ。

とりあえずこれでオレの今日の役割は終了。もう日も暮れる頃合だし、そろそろ帰ってもいいだろう。なんだかんだ言って今日はかなりハードだった。

まずは来賓として来た武偵関連企業のお偉いさん方への挨拶。正直これが一番疲れた。なにせ人数が多い。優秀な武偵に早く唾を付けておくという意味でも、アドシアードはいわば格好の品評会だ。ス

カウト狙いの企業なんて歩いてればぶつからないことはないくらいやってくる。おまけに爺さんや親父と比べられてる気が・・・いや、これはオレの自意識過剰か。

続いて、武器の使用実演。一般公開における目玉の１つだ。何でかといえば銃やなんやというのは男であれば一度は憧れるもので、それを間近で見たり、撃てはしないものの触ったりできるのは男子ならば滾るものがあるだろう。オレも分からないでもないからな。

それで次は屋台の手伝い。これは当初予定にはなかったが、料理できる奴が他に居ないという事態に陥ってた連中に頼まれて仕方なくやった。当然、だからといって手を抜くようなことはなかったけどな。一応商売だし。

そして今までやっていた護身術実演。何回かに分けての催しで、その度に模擬戦を披露するから割と疲れる仕事だった。

と、まあ結構なハードスケジュールだったわけで、オレは現在絶賛疲労中だ。さっさと部屋に帰って寝ることに・・・ん。あれって・・・。

「おーい！藍理ーー！」

校舎の近くに所在なさげに佇む人影は、例の無愛想系少女の遠藤藍理だった。声をかけたオレに対して怪訝そうな表情だ。

「・・・何か用か？」

返される言葉は非常に短い。こういうとこが無愛想系とオレが認識する理由だ。

「いや、特に用は無いんだけどな、たまたま見かけたからさ」

「・・・それだけか？」

「そうだけど？」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

話し掛けたは良いものの、如何せん間が持たない。なんとなくオレは藍理に嫌われてんのかなーと思えてくるから不思議だ。まあ、名前呼びを許してくれるくらいには信用してくれてると思っておこう。

「あーー、ところでお前、こんなとこで何してんだ？ヘルプとかどうしたんだ？」

とりあえず話題を提供してこの空気をどうにかしようと試みる。

「・・・ヘルプなら、もう終わった」

「へえ、何だったんだ？」

「・・・屋台の売り子だ」

ところがこれが地雷だったらしい。藍理のテンションがみるみるうちに急降下していく。とはいえ、ここまで聞いた手前、今更放置する事も出来ないわけで。

「・・・何があった」

「・・・・・・客に、渡そうとした豚汁をぶっかけた」

・・・うわー。

「・・・・・・おまけに皿を割り、釣り銭を間違え、入れる具をこぼし、更には・・・」

「もういい、悪かった。オレが悪かったから」

聞いて、いや、見ていられなかった。だって一言言うたびにどんどん顔が俯いてくんだぜ！？オレに人を苛める趣味はない。背景に黒い縦線が見えるレベルの奴にこれ以上突っ込める奴がいたら、ソイツはきっと勇者か魔王だ。生憎、オレはどっちになるのも願い下げ。

「ま、まあ、しょうがねぇって。慣れないことしてんだからさ、な。救護科の授業に接客なんてないんだし、気にすんなって」

ちなみに、強襲科にはある。潜入捜査を行う時なんかに必要なスキルだからだ。

「・・・そうだな」

オレの励ましに、藍理も少しは立ち直った様子だ。よかった、発端を作ったのはオレだから立ち直ってくれないんじゃないかとヒヤヒヤしたぜ。

「そうだ、景気づけに屋台でも回って行くか？なんなら・・・」

――――Ｐｉｒｉｒｉｒｉ！

そこまでオレが言いかけたときだった。突然、オレの懐の携帯が鳴った。

メールは武偵高教務科からのもの。内容は、

『ケースＤ７発令』

ただそれだけの文面に、背筋をゾクリと悪寒が走る。

『Ｄ』とは、アドシアード期間中の、武偵高内での事件発生を意味する符丁。

その中でも『Ｄ７』とは『ただし事件であるかは不明確で、連絡は一部の者のみに行く。なお保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎ立ててはならない。武偵高もアドシアードを予定通り継続する。極秘裏に解決せよ』――――つまりは、教務科も事態を把握できていないという状況を示す。

しかし、

「一体何が起こってるっていうんだよ。どうせ内容なんか知らせてくれないくせにこんな周知メール出しても意味ねぇだろ」

そう、何が起こったかまでは書かれていない。いわばこれは警戒を促すメッセージ。教務科も把握できないということに嫌な感じはしても、何が出来るというわけでもない。

「・・・何かあったのか？」

オレの呟きを聞いていたのか、藍理が問いかけてくる。

「ああ、実は・・・」

そこまでだった。藍理の方を向いたオレは、その背後に見た。

漆黒の衣に身を包み

白い仮面を被り

悠然と佇む

――――怪人の姿を――――

「っ！！」

気付いた時にはもう奴目掛けて走りだしていた。

「あ、お、オイ！」

事情を聞こうとしたのだろう藍理をそのままに、ひたすら突っ走る。

怪人はといえば付いて来いとでも言うように走り去っていく。オレ

はその背中を見失わないようにしていた。

だから、気付かなかった。

「なぜ、アイツがここにいる・・・？」

オレの走り去る寸前、藍理が、そう呟いていたことに。

「クソッ！どこ行きやがったあのヤロウ！！」

悪態を吐くというのは行き詰まった時が一番多い気がする。現在の状況がまさしくそうだ。

今オレがいるのはアドシアードで使っていない、一般人立ち入り禁止の校舎エリアだ。夕方だからか生徒の姿は無い。

ここまで怪人を追ってきたが、少し相手が速度を上げた隙に見失ってしまった。ここら辺は決して教室が密集しているわけじゃない。寧ろ、物置やら資料室なんかが多い。だとすれば奴はどこに逃げ込んだのか・・・。

当然これがアイツの罠であることは百も承知だ。でも、だからといって放っておくわけにもいかない。もしかしたら周知メールにあった事件を起こしたのはアイツかもしれないからだ。

とはいえ、どこに行ったか分からないんじゃどうしようもない。頭を掻いて唸る。そもそもアイツの狙いはオレのはずなのになんで逃げようとするんだろうか？何か意味があるのか？

と、そこまで考えてある場所に視線が行き着く。そこは、薬品庫。この前藍理を手伝った場所だ。奴の狙いがオレを有利な戦場に誘い込もうということなら・・・！

扉に駆け寄ってみれば、案の定鍵が壊されている。中に入って、薬品棚の間を奥へと走る。思ったとおり、そこには人一人がやっと通れるほどの穴の開いた床があった。梯子があるので、それを使って降りる。

聞いたことはあった。武偵高の地下に広がる火薬庫、武偵高三大危険エリアの1つ、地下倉庫（ジャンクション）。そこに至るための入り口が校舎の何処かに隠されている、そんな噂。いざという時に学校を要塞化できるようにという配慮からなんだろうが、まさか本当だとは思わなかった。薬品庫にあるだの、教務科にあるだの色々眉唾な話ばかりだったが、あながち嘘ともいえないのかもしれない。

地下通路は赤い非常灯しかなく、暗い。果たしてここで合っているのかとそう思っていると、

「シィッ！」

「ぐあ！」

曲がり角から黒い影が躍り出してくる。出会い頭の右ストレートはなんとかクロスした両腕で防いだものの、それでも体が後ろに下がった。クソッ、なんて力だよ！前に戦ったときよりも強くなってな

いか！？

対して奴は追い討ちのように蹴りを放ってくるが、特に当てる気もなかったのかオレが防いだのを見るとその反動を利用して再び逃げ出した。

「待てやコラ！」

完全に遊ばれている。奴がなんで地下倉庫なんかに逃げ込んだのかは具体的には知らないが、おそらくオレを嵌めるためというのは分かってる。だが、この状況では他の援軍を呼ぶのすらタイムロスになる。ご丁寧に携帯は圏外だ。

そういうわけでオレは奴を追う以外に選択肢がないのだ。そしておそらく、それは奴の狙い通りなんだろうな。

逃げる奴が駆け込んだ先は、とある部屋だった。真っ暗で中は良く見えないが、雰囲気からして結構な広さがありそうだ。

すぐに入るような愚は犯さず、入り口から中を伺おうとしたが、

「ハァァァ！！」

「ぐ！クッソ！！」

腕を取られ、背負い投げられる。なんとか着地はとったものの、真っ暗で何も見えない。チクショウ、部屋の中に放り込まれちまった。これじゃ怪人がどこにいるか分からない・・・！

「フフフ、招待に応えてくれたこと、感謝するよ。明智君」

焦るオレを嘲笑うかのように、怪人は語りかけてくる。声で居場所が分かればと思ったが、反響が大きすぎて特定できない。

「ふう、黙ってないで何か答えてくれないかね。私1人話しているというのもなかなか寂しいものがあるのだが」

「目的は何だ？またオレの指輪か？」

「君の、ではない。我が一族の、だ」

その言葉には確かな感情が込められていた。オレは以前からの疑問をぶつける。

「一族、ね。てことは、お前は怪人二十面相本人じゃないってわけだ。察するに孫ってとこか？それとも曾孫か？」

「フフ、探りを入れてくるのは結構だが、君はもう少し状況を鑑みてはどうかね？」

オレの問いには答えず、奴はオレを嘲り続ける。状況？暗くて何も見えない意外には何も・・・！

そこまで思考を巡らせて、オレは気付いた。鼻をつく、嗅ぎなれた臭いに。

「っ、そういうことかよ」

「気付いたかね？そう、ここは火薬庫さ」

「テメェ、やってくれんじゃねぇかよ」

「何かあると知りながら付いて来たのは君だろう？私のせいにしないでもらいたいな」

余裕綽々なのが癪に障るが、その理由が分かるからオレは動けない。火薬たっぷりの場所で銃を使えばどうなるか。素人でも分かる問題だ。跳弾１つでもゲームオーバー。

格闘戦に持ち込もうにも、地力ではおそらくあちらの方が上。おまけに自分で此処を選んだ以上、こっちの居場所を把握する術があると推測できる。だから、迂闊に動けない。

「さて、お喋りも楽しいものだが此処までにしておくとしよう。何せ、今からもっと楽しいことを始めようというのだから」

そうして、

「さあ、地べたに這い蹲ってもらうとしようか。どうか素晴らしく無様な姿を晒してくれたまえ」

暗闇の中、黒衣の狩人が牙を剥いた。

「こ、の、ヤロウ・・・！」

―――ドガッ！ガスッ！バキッ！

鈍い音とともに、オレの身体に連撃が拳、蹴り問わずに叩き込まれる。

警棒を抜いたはいいが、さっきから防戦一方だ。こちらから仕掛けようとすれば距離を取られ、下がろうとすれば追撃を喰らう。はっきり言ってこのままじゃジリ貧だ。

「っ、せやぁぁぁぁ！！」

気合一閃、警棒を振るうがあっさり避けられる。そのまま奴は闇の中へと消えた。追撃までの僅かな時間、オレは必死に状況を打開する手段を考える。

どうすればいい？理想は遠距離からの攻撃で仕留めることだが、銃は使えない。接近戦を仕掛けるのも論外。あっちの方が力も技術も上だ。

クソッ、銃さえ使えれば・・・ん？銃？そうか！アレがあった！となれば後は・・・。

「なあ、聞いてもいいか？」

「・・・なんだね？」

「なんでこの指輪を狙うんだ？いくらもともとそっちの物だったと

しても、ここまでして取り返そうとするほど価値の有る物なのか？」

「ふむ、指輪の価値、か」

狙い通り奴が話に食いついてきた。その稼いだ時間を使い、とある物を組み立てる。見てろよ、度肝抜いてやる。

「その指輪にはとある力がある、と言われているのだよ」

「力？」

「そうとも、彼の初代怪人二十面相を大怪盗にまで押し上げた絶大なる力が、ね」

組立てをしつつ考える。何故それほどの価値がある指輪を、爺さんはオレに託したのだろうか？知らなかった？有り得ない。あの爺さんがそんな間抜けなわけが無い。じゃあなんで・・・？

「まあ、私にはどうでもいいことだがね。私が興味があるのはただ1つ・・・君を打ち倒す事さ！！」

奴が動き始めるのが分かる。だけどな、オレもそう簡単にやられるわけにはいかねぇんだよ！！

眼を閉じ、外界からの情報をシャットアウト

深い深い深呼吸を1つ

体中に神経を行き渡らせる感覚をイメージする

研ぎ澄まされていく感覚

知覚されていく世界の形

ゆっくりと眼を開き、最後に視覚を他の感覚とリンクさせる

同調（シンクロ）・・・完了（コンプリート）

眼を開けると、オレに迫る怪人の姿が見えた。いや、それは正確な表現じゃない。厳密に言えば、肌を伝う風の流れ、鼓膜を揺らす空気の震え、それらが視覚とリンクして怪人の姿を形取ってくれている。だから見えなくても、見える。

「セヤァ！」

「っとぉ！」

今まで見えなくて避けられなかった攻撃が、避けられる。ただ見え

るというだけで、どこから、どんな風に、どんな速度で攻撃が来るか、知覚できる。

相手が蹴りを外して体勢を崩している間に距離を取らせてもらう。

此処からはオレの好きにさせてもらう・・・！

同時に、感覚共有をしたオレは奴の使う手品の種を理解した。

「成る程な、電磁波を利用しての位置把握か」

オレの眼には大気に網を張るように広がるものが、色付きで見える。

それらの基点は怪人自身。奴が電気使いであるならば、自ずと種は見えてくる。

「・・・」

対して奴は無言。警戒を深めているが、迂闊に動けないってとこか。

ならその隙を突かせてもらおうか！

左腕に装着したソレを引き絞り、狙いを定めて・・・射抜く！！

———ヒュウ！

「ぐあっ！」

初弾命中。次弾装填。発射。

———ヒュウ！

「っ！チィ！」

今度は避けられる。流石にリカバーが早いな。

「貴様！ここがどこだか、分かっているのか！？銃を使うなど・・・」

「うるせぇよ」

装填、発射。装填、発射。装填、発射。休む暇など与えず、撃ちまくる。

「が、ぐ、貴様ぁ！」

「だからうるせぇって」

移動する相手に合わせて、撃つ、撃つ、撃つ・・・！

と、1発が外れて火薬の袋に当たる。しかし、何も起こらない。そこで奴もようやく気付いた。

「これは、スリング弾！しかもゴム製の！」

そうオレが使ったのは『スリングショット』、簡単に言えばパチンコだ。だが、たかがパチンコと侮るなかれ、それなりのものなら鉛玉で水入りのドラム缶を貫通する。ちゃちな銃よりはよっぽど危険だ。おまけにオレが持ってるのは装備科の麒麟児平賀文謹製。ゴム弾でも威力は充分にある。

「ご、明、察！」

答える間も射撃を止めない。そのまま少しずつ接近して、

「喰らいやがれコンチクショウ！！」

回し蹴りを放つ！意表を突く格闘戦への移行に、奴もたまらず吹っ飛んだ。しかし、その勢いを利用して入り口に向かうとそこから逃げ出した。

「あ、待ちやがれ！」

その背中を見逃さないようにオレは駆け出す。ここまで来て、逃がしてたまるかよ！

薄暗い通路を疾走していくと、目の前が唐突に開けた。広い空間に出たらしい。

妙に寒気を感じる。おまけに、覚えのある気配とそうでない気配も。

「蒼志！どうしてここに！？」

やっぱりキンジか。おまけに神崎と星伽もいる。

「それはこっちのセリフだな。なんだってこんなとこにいるんだ？」

「白雪が『魔剣（デュランダル）』に攫われたのよ。それでここまで追ってきたの」

「『魔剣』？あの美人さんがか？というか本当にいたのか、そんな奴」

そういってオレが指差すのは、白人の鎧を着た美女。あれがいるか

どうかすら定かじゃない、彼の有名な魔剣だってのか？

「甘く見ちゃダメよ。アイツはイ・ウーのメンバーよ」

「あ～成る程ね」

見れば魔剣の横には怪人の姿が。何か話してるみたいだが聞こえない。

「おまけにアイツはジャンヌ・ダルク３０世、氷を操る魔法使（マツギ）いなんだから」

・・・ハイ？ジャンヌ・ダルクってアレ？オルレアンの聖女？英仏百年戦争の？・・・えーー。いや、もう驚かないけどさ。ホームズとかリュパンとか金さんとか子孫がいるし、主にすぐ側に。でも、なあ？

まあ、そんなことは正直どうでもいい。

「纏めてブタ箱にぶち込んでやる！」

「はあ！？アンタ聞いてたの！！相手は世界規模の犯罪者でおまけに超能力者なのよ！？」

「知るか！！オレはアイツをぶちのめさないと気が済まねぇんだ！！それを邪魔するんなら纏めてお縄になってもらう！！」

神崎が怒鳴ってくるが、ここで退くわけにはいかない。やっとここまで追い詰めたのに逃がしてたまるか・・・！

神崎を押しのけ、オレは星伽の横に並び立つ。

「あっちが2人になったからな、助太刀させてもらうぜ」

「え！ちょ、明智君！？」

「いくぜぇー！！」

星伽を置き去りに走り出す。悪いが時間がない。同調を使えるのも残り僅かな時間だ。一気に勝負を決める。

後ろで星伽が構えるのが分かった。感覚から察するに・・・刀から炎を出してる。・・・もう、オレは何も考えないようにしよう。非常識な力なんてどこにでも転がってるって思い知らされた。

ともあれ、まずは何故か炎に怯えてるジャンヌにグロックで銃撃を加える。あっさり避けられるが、それでいい、当てるのが狙いだったわけじゃない。狙いは・・・

「っらぁぁぁ！！」

「くぅっ・・・！」

怪人から引き離すこと！！ジャンヌは星伽に任せて、怪人の逮捕を最優先に考える。ここは火薬庫じゃないんだから、銃も使いたい放題だ。これならオレにも充分勝機がある。銃で追い詰めて、警棒で追撃。ヒット・アンド・アウェイを繰り返す。インターバルを短くすれば時間も使わずに相手を消耗させることができるはずだ。そして、

「！」

ついに怪人が膝をついた。もらった！これで・・・「ヤァァァ！！」なに！？

振りかぶった警棒を引き、慌てて下がる。見ればジャンヌが怪人の前に立ち塞がっていた。クソ！あと一歩だったってのに・・・！

「ジャンヌ！？」

「お前はもう行け！いくら私でも守りながらなど無理だ！」

それを聞いた怪人は少し躊躇ったがすぐに立ち上がると奥の通路の方へと逃げていった。

オレも逃がしたくはなかったが・・・目の前にジャンヌがいる。おそらく下手に動けば、斬られる。

「フ、貴様からこの聖剣デュランダルの錆になってもらうとしようか？」

・・・。もう驚かないぞー。あの剣が彼の有名なローランの聖剣だとしても、驚かないぞー。というか、あれって伝説じゃなかったか？実在するとか・・・いや、もはや何も言うまい。

「勘違いすんなよ、お前の相手をするのはオレじゃなくて・・・」

「やぁぁぁ！」

「くあ！」

「星伽だろ？」

流石にもうそろそろ限界だ。最初に受けたダメージも馬鹿に出来ないレベルで、正直動くのもキツイ。超能力者と戦うにはかなり無理がある。ならここは星伽に任せたほうがいいだろう。それに、キンジたちもタイミングを見計らっているようだから、ここは待ちだ。疲労困憊の星伽に任せるのは心苦しいが・・・。

ジャンヌが剣に光を蓄え始めて・・・神崎たちが走り出した！オレもその後に続く。

「ただの武偵如きが！」

神崎に気付いたジャンヌが剣を横薙ぎに放つが、

「一般人（バンピー）舐めんな！！」

その側面を蹴り飛ばす！逸れた剣先からは青い光に奔流が迸ったが、その先には何も無い。

そこにキンジが参戦、しかしジャンヌはそれに構わずキンジに突っ込んできた。オレと神崎が攻撃を加えるが、予測していたのかあっさりと回避し、キンジに剣を振り落とす！が・・・。

「――――ッ！――――」

キンジはそれを止めやがった。それも、片手で。『片手真剣白刃取り』。いくらヒステリアモード（言動と感覚で判断した）だからって、滅茶苦茶だろ・・・。

ジャンヌは構わず剣に力を込めているが、無駄だな。だって、

「キンちゃんに！手を出すなあああああッ！！」

星伽が聖剣目掛けて疾駆しているんだから。

「――――緋緋星伽神（ヒヒノホトギカミ）――――！」

逆袈裟一閃！緋色の軌跡を描きながら刃は聖剣を断ち斬り、

――――ドガアアアアアアアンッッ！！

天井まで火柱が上がった。凄い、凍りついた天井まで砕いちまってる！

流石のジャンヌもご自慢の聖剣を斬られるとは思わなかったのか、呆然としている。そこに、

「魔剣（デュランダル）！」

がちゃん！という音ともに掛かる手錠。掛けたのは勿論、

「逮捕よ！！」

神崎だ。

ジャンヌはがっくり項垂れ、沈黙する。もはや抵抗する気配はない。

こうして、怪人は逃がしたものの、アドシアード最大の厄介事、星伽誘拐事件は一先ず方が付いたのだった。

6弾　魔女（後書き）

弾篭め（後書き）
イィィィヤッホーーーーウ！！
祝・キャスト発表！！
なんと『とらドラ！』コンビがアリア・キンジのコンビ担当です！
予想どおりですね。というか絶対狙ってるだろ（笑）
さて、お待たせした今回はかなり難産でした。
8巻出たのに書けなかった・・・まあ要はスランプです。
あと、連載増やしたのも原因かも・・・。
それにしても8巻表紙のあの子、可愛くないですか！？ネタバレだから誰とは言いませんが。アリアはヒロイン過多になり始めてますよね・・・どう収拾つけるんだろう？

ちょくちょく色んなところを手直ししていきますので、読み返してみて下さい。要らないとことかは削っていくので。
次回までまた時間が掛かるとは思いますが、お待ち頂ければ嬉しいです。

7弾　後始末とこれからと（前書き）

長らくお待たせ致しました。

久々に一人称書いたけど書きづらい・・・。

まあそんな拙作でよければどうぞお楽しみください。

7弾　後始末とこれからと

「さーてと、そんじゃま、とりあえず連行するとしますか」

泣く星伽をさりげなく口説きおと・・・もとい宥めるキンジを待っていたオレだったが、さすがにそろそろシンクロの限界による眠気に耐え切れなくなってきたために急かすこととした。

仕込んでおいた興奮剤を見つからないように飲んで無理矢理意識を覚醒状態にしちゃいるが、いい加減限界というものはあるのだ。ぶっちゃければ早く寝たい。

「それもそうね。ほらキンジ、さっさとジャンヌを教務科に連れて行くわよ」

「ああ、そうしようか。アリアのきれいな手に跡が残らないように治療もしなくてはならないからね」

「にゃ！？き、きれいって・・・アンタ何言ってんのよ！」

あー、早く帰りたいなー。星伽は宥められて夢見心地だし、ジャンヌは・・・呆れた眼で見てる。

うん、気持ちはよく分かる。でも敵と同じ気分でいるってのも妙な感じというか、とりあえずキンジ自重しような。

「ハア、痴話喧嘩は後にしてくれよ。いい加減寒いし早いとこ此処から出ようぜ。とりあえず神崎、ジャンヌの足枷を外してやれ」

さっきのジャンヌの超能力のお陰で、この広間の気温は異常に低くなっている。このままずっとここにいたら風邪をひいちまいそうだ。とっとと地上に戻るに限る。

ところが神崎はといえば、顔を真っ赤にしながら反論してきた。

「だ、ダメよ！逃げられでもしたらどうするの！？」

「じゃあどうすんだよ？地上までピョンピョン歩きでもさせろっていうのか？」

「そんなの知らないわよ！」

な、なんという無茶理論・・・。でもなあ、結局のところ神崎が鍵を持っているからなぁ。

「分かったよ。ジャンヌの方はオレがなんとかする。と、ちょっと失礼するぜ」

ヒョイ、とジャンヌの手から折れた聖剣を取り上げる。さすがに武器を持たせたままってのもまずいからな。ついでに、鞘の方も拝借して収めると、

「キンジ、これ頼む」

キンジに放り投げた。さて、どうやってジャンヌを連れて行くか。

う～ん。

と、ジャンヌを眺めていたオレだったが、ここであることに気づく。

「なあ、お前寒くねぇの？見たところかなり薄着なんだが」

そう、ジャンヌの装備は露出の多い軽鎧を着ている。さっきも言ったとおりこの部屋は寒いわけで、正直見てるこっちが寒くなるような格好だ。

ところが当の本人は、

「問題ない。私は氷の魔女だぞ？このくらいの氷気はむしろ心地よいくらいだ」

等とのたまう。いや、そういう意味じゃないんだけど。あ、そうだ。オレは上着を脱ぐなり、それをジャンヌにかけてやる。かけられた本人は驚いたように振り返ってくるが、そんなに驚くようなことか？

「いや、あの、ダメだったか？見てるこっちが寒かったからかけさせてもらったんだが」

「・・・フン、勝手にしろ」

言うなりそっぽを向いてしまった。気難しい奴だな・・・って、さっきまで闘ってた奴に情けかけられても嬉しくはないか。

「ソウシ、この先の出口から地上に戻るわよ。さっさとしなさい！」

「へーへー分かりましたよ」

見れば星伽とキンジは既に奥の通路の方に向かっている。どうやらあっちの方から地上に戻れるらしい。

おっと、そういえば聞いておかなきゃならないことがあったんだった。

「なあ神崎、そこって梯子なのか？それによっちゃあジャンヌの連れて行き方を考えなくちゃならないんだが」

「階段みたいね。校舎裏のマンホールに続いているみたい」

「よく分かったな」

「キンジに調べさせたのよ」

なるほど、今のアイツは女性の言うことは無条件に聞くようになってるからな。おまけに身体能力も桁違いだし、それくらいは造作もないか。

さて、そうと決まったら

「ちょーっとゴメンよー」

「な！？」

ジャンヌの膝裏に左腕を滑り込ませ、右腕を肩に回す。俗に言う『お姫様抱っこ』ってやつだ。ジャンヌが真っ赤になって奇声を上げるが、我慢してもらうしかない。両足に手錠がかかってるから歩かせるわけにもいかないしな。

というか恥ずかしいのはオレも一緒だ。だって、なあ？いくら敵とは言ったって、こんな美人だぜ？しかも露出が多い格好をしているわけだし、なんというか落ち着かない。上着をかけといて心底よか

ったと思うよ。

「お、降ろせ！」

「無茶言うな。どうやって歩くっていうんだよ？早く此処から出たいんだから大人しくしててくれ」

ああもう！オレだって恥ずかしいんだっての！

何とか降りようと暴れるジャンヌを必死に抑え付けつつ、地上を目指して歩き始める。ハア、早く自室に戻って寝たい・・・。

何はともあれ、こうしてオレのアド・シアード初日は、またも現れた二十面相によって散々なものと相成ってしまったのだった。

「すいません、ココア１つ」

飲み干してしまったココアを追加で注文する。やっぱりここのココ

アはウマイ。何より奢りだし。

アド・シアードのトリ、チアのバックバンドも無事に終わり、打ち上げの一次会も終わったオレは突然キンジに呼び出された。聞けば神崎の奢りで二次会を開くという。幸い昨日はあまりシンクロを長時間使わなかったお陰か、ぐっすり寝ただけで例の倦怠感は取れたこともあり、オレは喜んでそのお誘いを受けた。そういう経緯で現在オレは、ロキシーにてキンジ、星伽、神崎と共にささやかな宴に興じているというわけだ。

といっても、いま現在は何やら星伽とアリアで譲り合いをしてるが、関わらんでおこう。どうせキンジ絡みだろうし、面倒臭そうだ。

さて、その間に昨日のあの後のことを少しだけ思い出してみるとするか。

あの後、無事に地上に出ることのできたオレたちはそのまま教務科に向かい、尋問科の綴へと引き渡した。そこまでは何の問題もなかったんだが・・・。

『明智ぃ、コレお前の上着だよなー？』

『？そうですけど・・・』

『容疑者に武器だらけの上着着せるやつがどこにいるんだー』

『あ・・・・・・』

怒られた。それも滅茶苦茶イイ笑顔で。笑顔のまま怒りの形相ってできるんだなと、オレは改めて学んだのだった。

そりゃそうだよな。仮にも連行中の容疑者に武器を与えるなんてオレが迂闊だったとしか言えない。綴が怒ったのも無理はないことだろう。怖かったけど。

まあその綴もツーンと横を向いたジャンヌを見た途端「イジメ甲斐がありそうだなァ」とこれまた質の違うイイ笑顔を浮かべていたが・・・。ジャンヌ、ドンマイ。無事ぐらいは祈っておいてやろう。

そうだ後で面会に行くか。アレの処遇も聞いておきたいし。もともとはアイツのものだからな。よし、そうし「――――白雪。あんたもあたしのドレイになりなさい！」はい？

思考を遮るようにあげられた大声の原因は、当然神崎だった。

というかドレイってなんだよ、ドレイって。

困惑するオレをよそに、神崎は言葉を続ける。

今回の一件でジャンヌを逮捕できたのは3人がかりで力を合わせたからこそだと、神崎は考えたらしい。同時に、パーティーを組むことの重要性も理解した。だから、白雪にも自分の仲間になってもらおうという結論に至ったと、そういう話のようだ。

あービックリした。ドレイっていうから何事かと思ったぜ。まあこれはオレには関係な「それとソウシ、あんたもよ」・・・くはないのか。

「何がだ」

「あんたもあたしのドレイになりなさい」

ああ、やっぱりそうくるか。一応今回共闘してしまったわけだしな。でも、オレの答えは決まっている。

「イヤだね」

「何でよ！」

「あのなあ、それのどこにオレのメリットがあるんだよ。どうせ二十面相はこれからもオレの前に現れるだろうし、下手したらお前らの戦いに巻き込まれるかもしれないだろ？そんなのゴメンだな」

ウソだ。オレとしてもイ・ウーの情報を提供してもらえるのはありがたい。だが、ここで無条件に受け入れては武偵としてよろしくない。しっかりとこちらの要求も聞いてもらった上で協力したほうが、オレとしても心置きなく戦うことができる。

「ただし、イ・ウーの情報の随時提供をしてくれるんなら、喜んで協力させてもらうぜ」

「・・・ホントね」

「勿論。契約は護るぜ？」

「いいわ、新しい情報が入り次第教えてあげる」

「交渉成立だな」

差し出したオレの手を神崎が握る。武偵憲章２条にもあるとおり、

武偵にとって契約は絶対。貴重な情報源の確保に成功できたわけだ。

「これからよろしくな、神崎」

「アリアでいいわ。チームなんだから白雪も名前で呼びなさい。そのかわりしっかり働いてもらうから、覚悟しなさいよ」

そういって神崎――――もといアリアはご起立なさってオレに指を突きつけた。

はいはい、まあオレのできる範囲ではあるけどきちんと働かせてもらうとしよう。再び騒ぎ始めた3人を見ながら、オレはそう決意したのだった。

その後、星伽――――白雪と一緒にキンジの部屋のカードキーを貰ったりしたが・・・どうしろというんだろうな、コレ。

「よう」

「お前か」

どうしてオレの周りには無愛想にしか返事を返さないやつばかりいるんだろうな、どうでもいいけど。

あれから数日経った今日、オレは綴の許可を得てジャンヌと面会をすることにした。まだ東京武偵局に引き渡してはいなかったらしく、案外あっさり許可が下りたのにはちょっと驚いたけどな。

そんなわけでオレはガラス越しにジャンヌとにらめっこという状況になっているのである。

「今日はお前に聞きたいことがあって来たんだ」

「・・・何だ」

不承不承といった感じに返事を返してくるジャンヌだが、続いたオレの質問に顔を歪めた。

「何故あの時、二十面相を逃がしたりしたんだ」

「・・・・・・」

だんまりを決め込まれるが、オレは構わず質問を続ける。

「わざわざ二十面相を庇ったりしなければ、少なくとも逃げ切ることくらいはできたはずだ。でもお前はそうしなかった。ましてアイツを囮にすれば確実に逃げられただろうに、お前は自分を囮にして

までアイツを逃がした」

「私は騎士だぞ。そんな卑怯な真似・・・」

「ウソだね。お前は騎士道なんかに拘る人間じゃない。この前の白雪の件を聞く限り、策を弄するためなら躊躇いなくそれを実行するタイプだ。滅多なことではそこに情を入れるような人間じゃない。そうだろ？」

「くっ！」

どうやら図星だったようで、ジャンヌの顔がより一層悔しげに歪む。だが、オレが聞きたい本題はここからだ。

「情を入れるようなタイプじゃないのに、なんでお前が二十面相を庇ったのか。簡単だ。二十面相はそれだけお前にとって親しい人間なんだ」

「・・・・・・」

「お前は、二十面相の何を知ってるんだ？」

暫く、沈黙がオレたちの間を漂う。ジャンヌが二十面相と親しいというのは、間違ってはいないと思う。二十面相の方も逃げろと言われたときに逡巡する素振りを見せた。少なくとも、イ・ウー内の仲間としてそれなりの関係があったことは間違いない。

だから、何か引き出せないかと思って面会に来たわけなんだが・・・無理か。仲がいいなら尚更情報を漏らすはずもないしな。まあ最初からダメもとだったわけだし。大人しく諦めるとしますか。

そんなことを考えていたオレだったが、その思考は唐突に喋りだしたジャンヌによって止められた。

「二十面相とお前の間には、浅からぬ宿命がある」

「ハア？そんなの当たり前だろ、アイツは二十面相でオレは明智の人間なんだから」

「そうではない」

公然の事実を口にするジャンヌを訝しむオレの疑問を、彼女は毅然とした口調で否定した。

「お前と二十面相の間には、お前が思っているよりも大きな因縁があると、そう言っているのだ」

そう言うとジャンヌはまた黙り込んでしまう。

う～ん。何が言いたいんだか分からない。何か謎を解きに来たつもりがまた謎が増えただけの気がするぞオイ。

まあこれ以上聞いても何も話してくれそうにないし、今度こそ諦めよう。

「まあ、覚えてはおくよ。で、次の用件だ」

「？」

もう話は終わっただろうと、キョトンとした表情のジャンヌをその

ままに、オレはポケットの中からあるものを取り出した。

それは、銀色に輝く鋼の欠片。おそらくは神代と呼ばれる伝説の時代から脈々と受け継がれてきた、幻想の断片。

「それは・・・！」

「そう、聖剣デュランダル、その折れた剣先だ」

言うなりオレは、驚くジャンヌにできるだけ深く頭を下げ、

「え？」

「頼む！オレにこの剣先を譲ってくれ！」

そう、言ったのだった。

7弾　後始末とこれからと（後書き）

今夜からアリアのアニメが始まるーーー！！

テンション上がってきた・・・！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3301l/

緋弾のアリア～蒼が奏でる協奏曲～

2011年4月18日07時12分発行